運び屋

制作　SHOSAKU事務所
作者　花房尚作

（注）本作品の著作権はSHOSAKU事務所に帰属しております。本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

☆あらすじ

黄金の三角地帯はゴールデントライアングルとも呼ばれるケシの栽培地帯である。ケシからつくられるヘロインを巡って様々な勢力が虚々実々の駆け引きを繰り返している。

ある日、緒形出版の代表である緒形春樹に取材の仕事が舞い込んできた。それはニューヨークの出版社から依頼された黄金の三角地帯での取材の仕事だった。その頃の緒形出版は業績が悪く、倒産の準備を進めているところだった。その準備が忙しいため、フリージャーナリストである高田勝子、通称タカにその仕事をまわした。

オガタ出版から黄金の三角地帯での取材を依頼されたタカは、香港で中国人の牛燐明を通訳に雇い、黄金の三角地帯へと向かう。

そのタカがラオスのエレチェ村で出会ったのは日本人の運び屋だった。運び屋であるロバートとポールの取材を進めていくうちに、過去にポールが起こした殺人事件についての真相を知る。

一方、タカに取材を依頼したオガタ出版代表の緒形春樹は、五年ものあいだ追っていた『麻薬横流し事件』の証人が、黄金の三角地帯で運び屋をしているとの確かな情報を得る。ニューヨークの出版社から取材費の増額を認められた緒形は、この機会を逃すべからず、といった感じで、麻薬横流し事件の関係者である鈴木ゆきと供に黄金の三角地帯に向かった。

鈴木ゆきは兄の死の真相を突き止めるのが目的だった。訪れたエレチェ村で緒形が革命軍に身ぐるみを剥がされたため、仕方なく引き返したホテルでタカとバッタリ出会う。（日本人のジャーナリストが泊まるホテルはほとんど同じホテルである）。

ポールが起こした殺人事件と、麻薬横流し事件はそれぞれ別の事件であったが、タカはそれらを同一のものを考えた。その間違いに気が付いたときにはすでに遅く、ポールは自殺していた。

相棒を失ったロバートの心は深く落ち込み、放心状態であった。そこにエレチェ族のチャンが現れて、ロバートは射殺される。

登場人物たちの目的、思惑、過去、それらが複雑に絡まりあって、それぞれの結末（バッドエンド）へと向かっていく。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

☆登場人物表

ロバート（山下康幸）　運び屋
ポール　（佐藤正人）　運び屋
緒形春樹　オガタ出版代表取締役
高田勝子　フリージャーナリスト
鈴木ゆき　鈴木健太の妹
牛燐明（ニョウ・リンメイ）　香港人通訳
チャンタサック・クンタニット　少数民族のエレチェ族
オモーラ・チャグスネット　少数民族のエレチェ族
ブンミー・ダオヴィーサイ　少数民族のエレチェ族
神エレチェ
その他

※本作品は楽団の参加を想定しており、楽団の者がエレチェ族の人びとを演じる。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

☆作品にかけた思い　花房尚作

私の住んでいるマンションの近くに図書館がある。時間がある時は図書館に行き本を読む。その日も図書館に佇む活字たちを眺めていた。ふと「ラオスの風」なる書籍が目に入った。ラオスで生きる少数民族を扱ったルポタージュだった。これは絶対に面白く無いと直感し、その場を立ち去り「さくらももこ」の最新刊を手に取った。私は「さくらももこ」のファンなのだ。「さくらももこ」を堪能して再び書籍を物色し始める。またもや「ラオスの風」なる書籍が目に入った。私はその場を立ち去り、今度は「さくらももこ」の旧作を読み始めた。その日は「さくらももこ」を存分に堪能し、家に帰った。

その数日後、ひょんな事から「ラオスの風」の作者に会うことになった。人生とは不思議なものだ。妙な巡り合わせが起こる。神の悪戯だろう。私は慌てて図書館に行き「ラオスの風」を読んだ。

ラオスはケシの大栽培地区である。麻薬という黄金の資源をめぐって、麻薬バンコクコネクション、チャイニーズマフィア、旧国民党勢力、更には独自の地場麻薬軍団に加え、カレン軍などのビルマ少数民族反政府勢力もからんでいる。

「ラオスの風」にはブッピー族なる音楽を神として信仰している民族が紹介されていた。彼らは楽器を常に持ち歩き、楽器で言葉を交わしている。

実のところ、私は東南アジアの宗教について相当なウンチクを持っている。ワット（僧院）、ポー寺院、パグナム僧院、一時僧、ヨーム（保証人）、托鉢、バーツ（鉢）、ナーガ（大蛇）、タマユット総本山、ベンチャマボピット僧院（大理石僧院）などを訪れて、インタビューをしている。そのため、そのような民族は聞いたことが無く、作者の創作ではないかと考えた。

その一週間後、私は作者に向かって、「あれは創作でしょ」とひと突っ込み入れた。その作者は「それではラオスに一緒に行きましょう」と答えた。百聞は一見にしかずといったところだ。それはわかる。確かにごもっともだ。しかし「ブッピー族」が生活しているのは黄金の三角地帯である。即座に「いやです」と断った。とはいえ、まぁ何だかんだあって行く事になった。東京からシンガポール、バンコク、そしてチェンマイ経由で、ラオス国境地帯に入った。

そこで出会った人びとの笑顔、ケシの花、アヘンの香り、そして山中で見つけた二つの墓。そこにはロバートとポールの名前が刻まれていた。そこに眠っている二人の日本人の物語をお伝えしたかった。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

運び屋

○場　緒形出版

デハケは中央・上手・下手の三箇所。

チャンはストーリテラーの役目を果たすため、

舞台にはそれ専用のスペースがある。

サスが入ってチャンの独白。

チャン「どうも、みなさまはじめまして。僕はエレチェ族のチャンタサック・クンタニットです。チャンタサックが名前でクンタニットが苗字です。エレチェ族の名前は二つから四つくらいの縁起のよい言葉の組み合わせでつくられています。エレチェ語がわかればなんとなく意味がわかって覚えやすいのですが、日本人の方には馴染みがないので覚えにくいかと思います。みなさんはチャンタサックを短くしてチャンとお呼び頂ければ結構です。それではこれからみなさまにエレチェ村で起こった出来事をお話します。あっ、ちなみにエレチャというのは音楽という意味です。音を楽しむと書いて音楽です。エレチェ村は音が溢れる楽しい村です。みなさまも是非遊びにきてください。……さてさて、それではお話を始めさせていただきます。二時間ほどのお話になります。これはタカさんたちがエレチェ村にやって来る一ヶ月前の事です。その当時のタカさんはＴＶ局の報道部を辞めて仕事らしい仕事がまったくなかったそうです。その辞め方というのがとても酷かったらしく、取引先と揉めに揉めたすえに上司に怒られて、その上司の禿頭を手の平で叩きながら辞表を提出したそうです。退職した後もタカさんの無鉄砲なキャラは相変らずで、あちこちで取材をしまくって、山のように原稿を書きまくって、その原稿を出版社に持ち込みまくっていました。それでも一言多いキャラと強気の性格が災いし、どこもかしこも断られ続けて途方に暮れていたそうです。そんなとき小さいながらも出版社を経営している緒形さんから、仕事があるから会いたいとの連絡を受け、飛び込み乗車は御遠慮下さいと言うアナウンスを無視し、閉じているドアを強引にこじ開け、止めに入った駅員さんに逆切れし、改札を出る時もまた駅員さんに逆切れし、まわりの人の迷惑などかえりみず、緒形さんの会社がある雑居ビルに向かったそうです」

携帯で話しながら出てくる緒形。

緒形　「おうおう。あと反対派の意見を聞いてきてくれ……分かった分かった。詳しい報告は会社に戻って来てからでいいから、そっちも頼む。分かってるって、じゃー頼んだぞ」

別の着信を受ける緒形。

緒形　「はい、緒形出版の緒形です。あ～、はいはい。それはちょっと待ってもらえま

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

すか」
そこに入ってくる鈴木ゆき。
ゆき　「こんにちはー」
手で挨拶する緒形。
緒形　「はい、わかってます。ですから少し待ってもらえればなんとかなります。それなら三日で仕上げて送りますのでよろしくお願いします。いえこちらこそ助かります。はい。それでは」
通話を切る緒形。
ゆき　「緒形さん忙しそうですね」
緒形　「ここんとこちょっとバタバタしてる」
ゆき　「一人ですか？」
緒形　「相模ちゃんを守る会が捕獲に反対しててさ」
ゆき　「なんですか、それ？」
緒形　「知らない？　相模ちゃん」
ゆき　「知らないです」
緒形　「相模湖に現われたワニ、飼えなくなって捨てたんだろ。捕獲するべきか、自然のまま放っておくべきかで、今や行政も巻き込んで大もめ。県もしばらく見守る方針なんだと。その取材でみんな出てる」
ゆき　「捕獲するべきですよね」
緒形　「それがそうも行かないんだよ。何でもそのワニが癒し系らしくてさ、捕獲反対運動が熾烈なんだ。相模ちゃん饅頭なんてのも売っててつくづく日本は平和だと思うよ」
緒形　「ゆきちゃんはどうしたの？」
ゆき　「あっ、これなんですけど（小さなメモを渡す）。お兄ちゃんの部屋に００７のポスターが貼ってあって。あっ、お兄ちゃん００７のファンだったんです。そのポスターが剥げてたんで直してたら壁に切れ目があって、その切れ目の奥にその紙が隠してあったんです」
緒形　「手の込んだ隠し方だね」
ゆき　「そうなんです。何かの手がかりに成ればと思って」
緒形　「暗号で書いてあるな」
ゆき　「そうなんです。私じゃ手におえなくて」
緒形　「調べとくよ。何か分かったら連絡する」
ゆき　「よろしくお願いします」
緒形　「うん。あっ、赤ちゃん産まれたよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ゆき　「……ワニのですか？」
緒形　「違うよ。俺の。桃子って言うんだ」
ゆき　「男の子ですか？」
緒形　「女の子だよ」
ゆき　「（笑）おめでとう御座います。今度、会わせて下さいね」
緒形　「おぅ。あっゆきちゃん。あのさ、あっこれは調べるよ。これは事件の真相を突きとめられなかった俺の責任でもあるから。実はさ、月間オガタは来月号を持って打ち切るんだ」
ゆき　「どうしてですか？」
緒形　「資金繰りが悪くなってね。なんともしようがなくなちゃった。今までご愛読ありがとう御座いました」
ゆき　「そうですか、とても残念です。世の中のタブーや不条理を突く月間オガタは私のバイブルでした」
緒形　「ゆきちゃんにそう言って貰えて嬉しいよ」
ゆき　「こちらこそ何処も相手にしてくれなかったお兄ちゃんの事件を特集してくれてありがとうございました」
緒形　「お兄さんは事故死の訳ないんだ。アレは神奈川県警の完全なねつ造だ。あいつら完全にもみ消しやがって。あっ、コーヒーでいい？」
ゆき　「すみません。じつはバイトを抜けてきたのですぐ戻らないといけないんです」
緒形　「そぅ、メモの件は調べて連絡するから」
ゆき　「よろしくお願いします。それじゃ」
緒形　「それじゃ」

部屋を出て行くゆき。
入れ違いにやってくるタカ。

タカ　「なに？なに？　援助交際？」
緒形　「なんでだよ」
タカ　「奥さんにチクっちゃおうかな」
緒形　「それは辞めてくれ。あいつ冗談通じないの知ってるだろ」
タカ　「誰なの？」
緒形　「ある殺人事件の件で相談に乗ってるんだ。しかしえらい早いな」
タカ　「ぶっ飛んで来たから。飲み物ある？」
緒形　「うん。それにしたって早いだろ」
タカ　「むかってたのよ。銀行からの出資断られたって聞いて、こりゃ一大事だと思ってさ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

緒形　「あぁそっか。話をするの忘れてたな。ぶっちゃけオガタ出版の業績は思わしくなく、やむなく廃業が決定してしまいましたとさ。ちゃんちゃん」
タカ　「ちゃんちゃんって、社員のみんなはどうなるの？」
緒形　「（コーヒーを渡しながら）毎日出版が引き受けてくれることになった。いちおう大手の出版社だから不安定な零細企業のオガタ出版で働くよりもいいだろう。それもあって廃業を決めたんだよ」
タカ　「社長はどうするの？」
緒形　「どうしようかなって思ってる。今は糸が切れた凧みたいな状態だからしばらく先のことは考えたくないな。それよりも月刊オガタの最終号の締め切りと事務所の片付けに追われ大わらわだよ」
タカ　「そっか。そうそう、駅員のマナーって成ってないよね。人のマナーをとやかく言う前に自分たちのマナーを正してほしいわ」
緒形　「俺はタカのマナーに問題があったんだと思うぞ」
タカ　「うわ、何それ」
緒形　「タカはうちでバイトしてる時から俺にタメ口だったからな」
タカ　「社長は特別。最低限のマナーは私も心得ています。で、仕事って何？」
緒形　「あー、これはうちの取材じゃ無くて、他の出版社の仕事なんだけどさ」
タカ　「そりゃそうでしょ。だって緒形出版潰れるんだから。潰れる会社から仕事なんてありえないでしょ」
緒形　「タカは一言多いんだよ。あのさ、麻薬って興味ある？」
タカ　「覚せい剤？」
緒形　「日本では覚せい剤が主流だけど、そっちじゃなくてヘロインのほう」
タカ　「もしかしてヤクザ関係？」
緒形　「違う。黄金の三角地帯」
タカ　「（驚いて）お、黄金の三角地帯！」
緒形　「煩いよ」
タカ　「だって、世界最大のケシの栽培地域でしょ」
緒形　「ニューヨークの出版社が随分前から練ってた企画で、ああ言う地域は政局が不安定だし反米感情が強いから取材許可がなかなかおりないんだ。で、月刊オガタの三月号でやった麻薬特集を見た人が緒形出版に話を振ってきたって訳」
タカ　「潰れるとも知らずに。おっとまた要らん一言を言ってしまった」
緒形　「本当は俺が行きたかったんだけど、最終号の編集と会社の整理でバタバタしてるからさ」
タカ　「出発は？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

緒形　「早ければ早いほど良いらしい。ただし、かなり治安の悪い場所だから危険な仕事になるよ。どうする？」
タカ　「もちろん行く。こんなチャンス滅多にないからね」
緒形　「うん。でも無理はするなよ」
タカ　「勿論、承知の助だよ。大船に乗ったつもりで私に任せて下さい」
緒形　「タカもほんと馬鹿だよな。ＴＶ局の血縁による在職率は８０％を超えているんだぞ。その狭き門を突破して、希望していた報道部にも配属されたのにあっさり辞めちゃうんだもんな」
タカ　「大手って安定志向だからタブーが多いのよ。大衆に迎合しないといけないから稚拙だしね。あれもするな、これもするなでやってられないって思ってフリーになってみたものの、出版社に原稿を持ち込んでも断られ続けてドン詰まりの日々なのであります。ちゃんちゃん」
緒形　「（笑）あっ、タカさ、これなんだか分かる？（メモをタカに見せる）」
タカ　「んー。連絡先みたいだね」
緒形　「連絡先？」
タカ　「住所かなんかを８進数か１６進数にしてるんじゃないかな」
緒形　「なるほどな」
タカ　「何なのこれ？」
緒形　「うん、ちょっとね」
タカ　「そっか。私、腹減ったんでこれからラーメンでも食べに行くけど、社長もどう？」
緒形　「いや、俺は良いわ」
タカ　「うわ、断られた」
緒形　「あー。ごめん。ちょっと用事があるから。えっと、これが担当者の名刺、オガタからの紹介だって言えば分かるからさ。後は任せるよ」
タカ　「了解しました。では早速ラーメン食って、電話して、打ち合わせしてきます」
緒形　「うん」
タカ　「横浜っていったらラーメンだよね、やっぱ（ハケル）」
緒形　「（つぶやく）００７か……」
舞台が薄暗くなる。
薄暗いなかでメモを調べている緒形。
エレチェ族のチャンにサスが当たる。
チャンの独白。
チャン「人里離れた山のなかに紅く咲くケシの花、そこから取れる生の阿片は僕たちの嗜好品であり医薬品であり麻酔薬でもあった。そのケシの果皮に傷を入れ、そこから

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

流れる液体を集め乾燥させたものが生アヘン。アヘンからモルヒネが精製され、モルヒネに無水酢酸を混ぜて数時間加熱し精製すると麻薬の王様ヘロインになる。これを摂取すると精神と肉体が緩み、外部世界に対して無関心・無感動になり幸せな時間がゆっくりと流れる。ベトナム戦争時にアメリカ兵が恐怖心を麻痺させる目的で大量利用し、この為にアメリカは敗戦した。一回の使用量は平均１５～３０ｍｇ。使用方法は静注では注射痕が残るため、鼻からの直接吸引、又はアルミやスプーンに乗せ、それをあぶり、出てきた煙を吸いこんでいくチェイシング・ドラゴンが主流。抑制効果よりも興奮効果がお好みの方はコカの葉から抽出されるコカインがお薦め。コカインを摂取すると精神と肉体が覚醒し、思考力や判断力の増加や運動能力の向上効果がある。使用方法はハリウッド映画に出てくるように鼻からの吸引が多い。その他には科学合成品の覚せい剤やＬＳＤなどがある。これらの麻薬は強い精神的依存症があるため使用量が増えて中毒になりやすく、幻聴や幻覚、フラッシュバック、最悪の場合は脳出血により死に至る恐れもある。世界の薬物産業は自動車産業をしのぎ、原油や天然ガスと並ぶ規模となっている。現在、世界でケシが大規模に栽培されている地域は、パキスタン・アフガニスタン・イラン三国のいわゆる黄金の三日月地帯。そしてメコン河を挟んだタイ・ミャンマー・ラオス三国のいわゆる黄金の三角地帯である。黄金の三角地帯の又の名を、ゴールデントライアングルと呼ぶ」

サスが落ちる。

大量の計算式が散らばっている。

携帯を取り出す緒形。

緒形　「ゆきちゃん……わかったよ……奴の居所がさ」

暗転。

舞台に「運び屋　～ゴールデントライアングル～」の文字。

○場　エレチェ村（取引部屋）

明転。

エレチェ村では楽器の音色が常に聞こえる。

そこに黒いスーツを着た二人の日本人。

静かに本を読んでいるロバート。

ヘロインを吸いながら静かに微笑んでいるポール。

ポール　「あのさ……ライオンってバッタ食うらしいよ」

ロバート「食わないだろ」

ポール　「食うんだよ」

ロバート「食わないよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ポール　「猫だってゴキブリ食うだろ。ネコ科は昆虫を食うんだ。そりゃ、必死には食わないと思うけどね」
ロバート「……」
ポール　「なに読んでんだよ」
ロバート「エレチェ族の経典だ」
ポール　「面白いのか？」
ロバート「まあな」
ポール　「なんて書いてんだ」
ロバート「汝は罪の赦しを得させるために、悔い改めの音楽を宣べ伝え、そこに演奏のあらんことを願い……」
ポール　「ちょっと待ってくれ。要約して頼むわ」
ロバート「遥か昔、この地に神エレチェが現れ、音楽を置いて行った。音楽は世界に広がり愛され続けている。我々は神エレチェの意志を受け継ぎ、四年に一度エレチェ祭をとり行う。……どうやら明日、この四年に一度エレチェ祭ってのがあるらしいんだ」
ポール　「それで何時まで経っても用意できないのか？」
ロバート「祭りの準備が忙しくて、アヘンの搬出に時間がかかってるんだろ」
ポール　「ふーん。でもさ、あいつらトイレに行っちゃ弾き、飯食っちゃ弾き、何かする度に楽器を弾くだろ。それが作業効率を下げる要因だって分からないのかね」
ロバート「このエレチェ村は音楽発祥の地なんだよ。楽器を弾く事が信仰の証になっている。なんでも大昔に神エレチェが楽器を肌身はなさず持って演奏するよう教えを説いたらしい」
ポール　「そんなんだから利用されちまうんだ。あいつらがケシを栽培して手にする金なんて微々たるもんだ。あれじゃ何時まで経っても豊かになれない」
ロバート「宗教とはそういうものだ。端から見ると馬鹿げている。それに物質的豊かさよりも精神的な豊かさを求めてるんじゃないか。エレチェ民族は科学や文明を拒絶して誇り高く生きている。産まれ育った山や川や森を大切にし、伝統に従いながら生きている。エレチェの文化を粛々と継承して、日々その文化の中で生活することが彼らの喜びであり幸せだ。信仰による精神的な豊かさによって彼らは人間としての優しさを持っているし、とても平和的に生活している」
ポール　「でもさ、利用されて生きるのが幸せだとは思えないな」
ロバート「それよりもだ。最近、少しずつヘロインの摂取量が増えてるだろ」
ポール　「やらねえヘロインは、ただのヘロインだ。これ俺の言葉。どぉ？」
ロバート「どぉって？」
ポール　「ロバートはどうもノリが悪くていけねぇや。これくらいたいした量じゃね～

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

よ」
ロバート「何事もほどほどが大切だ。ほどほどにしておかないと何時か必ず一線を越えるぞ」
ポール　「そんなことは分かってるよ。それにしてもおっせ～な。アフガニスタンの時は早かったぞ」
ロバート「俺がポールと組む前か？」
ポール　「あぁ。それがなーんも無い所なんだけどさ、政府とつるんでたから待遇が無茶苦茶良くてな。国境線まで送り迎え付きだよ。タンバリンだっけ？」
ロバート「タリバンだ」
ポール　「そのタリバンと組んでたから楽だった。そのタリバンをアメリカが叩きやがったからコネクションが無くなっちまった。おかげで今度はゴールデントライアングルだ。アメリカさんは全くもって余計な事しやがるぜ」
ロバート「此処もなかなか良いよ。のんびりしてて」
ポール　「のんびりしすぎだろ。で、結局何キロ買ったんだ」
ロバート「今回は１０キロ。一万八千ドルだ。日本円でだいたい２３０万」
ポール　「相場としてはまあまあだな」
ロバート「香港まで持っていけば百倍で2億3千万。経費を差し引いても2億の儲けだ」
ポール　「ヘロインにまで精製すれば8億はくだらないんだけどな」
ロバート「秘密工場でヘロインにするのは組織の仕事だ」
ポール　「俺たちは生アヘンを運ぶだけのただの運び屋か。でもよ、どんな仕組みになってるんだろうな。俺たちが香港でブツを流してる組織の事なんだけどさ、これだけ儲かる仕事を組織は独占していて、ヘロインの秘密工場にしたって明らかに政府とグルだろ。俺たちのボスって有名な政治家だったりするんじゃねーか。ネオコンとかユダヤとかさ。もしかしたらヨーロッパの武器商人かもしれないな」
ロバート「余計な詮索はやめておけ。俺たちの取り分は2億。二人で分けて一億ずつだ。それで充分だろ」
ポール　「あぁ充分だ。まぁ末端の俺たちにはうかがい知れない世界だし、考えるだけ無駄だな。しかしおっせ～な。もしかしてあいつら、はめる気じゃねーか？」
ロバート「誰が誰をはめるんだ？」
ポール　「エレチェ族が俺たちをに決まってんだろ。他に誰が居るんだよ。えっ、なに？ロバートには此処ら辺に山田君でも見えるのか？」
ロバート「山田君って誰だ？」
ポール　「知るかよ。俺には見えねえんだから」
ロバート「（納得）なるほど」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ポール　「なるほどってなんだ。ロバートには状況判断能力が無いのか？　それとも状況を判断する能力が無いのか？　どっちだ？」
ロバート「どっちも同じだ」
ポール　「エレチェ族の奴ら俺たちを国連捜査官かＣＩＡに売ってるかもしれんぞ」
ロバート「あいつらも生活がかかっている。そんなバカな事はしない」
ポール　「あのな、此処では陰謀や策略が渦巻いてる。買収されてるとも限らんだろ」
バート　「確かにポールが心配するのも分かる」
ポール　「そうだろ」
ロバート「ただし、神エレチェは裏切り行為を禁じている。あいつらがエレチェの教えにそむく事は絶対に無い。だから大丈夫だ」
ポール　「そうか。それなら心配なさそうだな。あのな、これは元ＣＩＡを名乗る情報屋のオヤジが言ってたんだけどな、国連捜査官やＣＩＡってのは出来るだけ俺たちを殺さないで生け捕りにする必要があるんだ。ルートやバックの組織を知りたいからな。それに奴らだって死にたくはない。だからいきなり踏み込んでくることはないんだってさ。踏み込む前に必ず、ジャーナリストを装った奴が俺たちの様子を探りに来るらしいよ。取材させて欲しいって奴が来たら要注意だってさ。そんでもって様子を確認して準備が整ったら、催涙ガスを投げ込んで武装したオジサンたちを突っ込ませる。拳銃やら棍棒やらもった知らないオジサンたちが飛びかかってきて、そりゃ怖いらしいよ。捕まったらもう最期で、電気を流されたり生皮を剥がされたり、そりゃひどいもんだってさ。生かさず殺さず廃人にさせて最終的には殺すんだよ。だからよ、ジャーナリストを名乗る奴には要注意だぞ。分かりやすく言うとジャーナリストを名乗る奴には要注意だぞ」
ロバート「同じ事を言ってるぞ」
ポール　「それだけ用心しろってことだよ」
ロバート「あぁ、用心しよう」
そこに聞こえてくる楽器の音色。
楽器を弾きながらやって来るチャン。
ポール　「おっせ～よ。ほんと楽しそうに演奏してやがる。そんなふうに楽器を弾きながら作業してるから遅くなるんだよ」
演奏を誉められたと思い得意げなチャン。
ポール　「褒めてねぇっつうの」
エレチェ語で話しかけるロバート。
エレチェ語が分からないポール。
ポール　「……何て？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート「もうしばらくかかるそうだ」
ポール　「もうしばらくって何時までだよ」
ロバート「祭りの準備が忙しくてなんとも分からんらしい」
ポール　「勘弁してくれよ。こっちにも予定つうもんだあるんだからよ。神エレチェさんに祭りよりも約束を優先させなさいって説いて欲しかったよ」
　ロバートに話しかけるチャン。
　この時、ロバートの表情が一変する。
ポール　「……どうした？」
ロバート「ジャーナリストが来ているそうだ」
ポール　「（ためて）ファック！！！！」
　曲ＩＮ。
ポール　「こいつ裏切りやがった！」
ロバート「まだそうだとは限らん」
ポール　「だってジャーナリストが来てるんだろ。絶対、国連捜査官かＣＩＡだって。や、や、やべぇじゃね～か」
　相手の人数を尋ねるロバート。
　チャンは指を二本差し出す（ピースサイン）。
ポール　「なに勝ち誇ってんだコラ」
ロバート「二人だ」
ポール　「何が？」
ロバート「何人いるか聞いたんだ」
ポール　「で、何人なんだよ」
ロバート「だから二人だ」
ポール　「様子を探りに来たのが二人で、離れた所にはもっと沢山いるぞ」
　指を狐の形にしているチャン。
ポール　「それは何だ？」
ロバート「狐だそうだ」
ポール　「くそー！　はめられたー！」
　大喜びしているチャン。
ロバート「取り敢えず会ってみよう」
ポール　「国連捜査官にか？」
ロバート「それはまだ分からん」
ポール　「絶対にそうだって」
ロバート「会って確かめるんだ。囲まれているならどのみち逃げ道はないだろう。だっ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

たらこっちから仕掛けよう。最悪の場合人質に取れる」
ポール　「なるほど、そうだな。逆に電気流して生皮はがしてやる」
ロバート「（エレチェ語）そのジャーナリストを此処に通してくれ」
チャン　「（エレチェ語）はい、分かりました」
　楽器を弾きながら出ていくチャン。
ポール　「俺たちをなめやがって一泡吹かせてやる」
ロバート「俺が正面に立つ。ポールは援護してくれ」
ポール　「了解」
　銃を出し、入り口横の死角に立つポール。
ポール　「（つぶやく）ぶっ殺してやる。ぶっ殺してやる」
　入り口正面に立つロバート。
ポール　「そうだ。あのよ、もしも捕まりそうになったら迷わず俺を殺してくれよ。拷問なんて絶対に嫌だからよ」
ロバート「あぁ、お前を殺して、俺も死ぬよ」
　人の気配。
ロバート「来たぞ」
　現れるタカ。
　死角から素早くタカの頭に銃を突きつけるポール。
タカ　「……」
ロバート「Don't move.」
ポール　「アジア系の女か」
ロバート「Raise a hand.」
　両手をゆっくり上げるタカ。
ロバート「What is a business?」
タカ　「日本人だから日本語で大丈夫です」
ロバート「……」
タカ　「なんだったらパスポートでもお見せしましょうか？」
　パスポートを出そうとする。
ポール　「動くな！」
　両手を再度上げる。
ロバート「用件は何だ？」
タカ　「私、フリーランスでジャーナリストをやっておりまして、よろしければ取材させて頂けないでしょうか？」
ポール　「おい、騙そうったってそうはいかねえぞ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート「もう一人はどうした？」
タカ　「もう一人？」
ポール　「しらばっくれんじぇねーよ！　仲間がもう一人いるだろうが！」
タカ　「怖いなー。通訳の子なら外に待たせています」
ポール　「好い加減な事言うんじゃねーよ！」
タカ　「本当です。なんなら呼びましょうか？」
ロバート「それは後だ、三歩前に出ろ」
　言われた通り動くタカ。
ロバート「荷物をゆっくり下ろせ」
　言われた通り動くタカ。
　ロバートとポールはアイコンタクト。
　タカの体を調べるポール。
タカ　「日差しと湿気で外はかなり暑いですけど、此処は風が通らないからもっと暑いですね。飲み物とかありますかね。喉が乾いちゃって、飲み物はないですかね」
ロバート「……」
タカ　「飲み物は……ないのかな？」
ポール　「道具は持ってねえな」
　次に荷物の中身とパスポートを調べる。
タカ　「ニューヨークの出版社から回ってきた仕事なんです。アメリカ人だといろいろ問題があって現地取材が難しいらしくて、日本人なら大丈夫だから行って貰えないかって頼まれて、それで取材しにやってきたんです。そしたらさっき日本人が仕事で来てるよって聞かされて、いや～愕きました。こんな所で日本人に会えるなんて思ってもいませんでしたから。こりゃ会って話を聞かなければと思い馳せ参じた次第です。よろしければお話をお聞かせ頂けないでしょうか？」
ロバート「とぼけるな」
タカ　「とぼけてないです」
ロバート「誰の指示で来た？」
タカ　「だからニューヨークの出版社から回ってきた取材です。ゴールデントライアングルには強力な中国人シンジケートがあって日本のやくざは香港あたりで買い付けをしてるんですよね。それなのにどうして現地で買い付けできるのか教えて頂けますか。えっと、その前に何処の組の方ですか？」
　何もみつからず、首を振ってみせるポール。
　そしてニヤケながらマジマジとタカの体をみる。
タカ　「な、なんですか？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ポール　「おねえさん、良い体してるね。ちょっとその服脱いでもらえる」
タカ　「服ですか？」
ポール　「ちょっとその服抜いで裸になってもらえる」
タカ　「えっ？」
ポール　「裸だよ、裸、素っ裸になれ！」
タカ　「冗談でしょ」
　ヘロインを差して、タカの手に握らせるポール。
ポール　「これを吸いな。鼻から吸うんだ」
タカ　「ちょっと待ってください」
ロバート「正直に話したら許してやる」
タカ　「正直もなにも、取材できないならできないってことで、それならそれで諦めますよ」
ポール　「心配すんな、ただのヘロインだよ。吸ったら楽になるからよ。で、服脱いでくれよ。まぁ脱がせてやってもいいけどな。自分で脱ぐのと俺に脱がされるのとどっちが好きだ？」
タカ　「どっちもいやです」
ポール　「おいおい。それじゃぁ話にならないよ。取り敢えず吸ってみろ。吸っちまえば後はなるようにしからないから吸ってみろ。これすっげえぞ。脳天まで感じるぞ。そこまで感じたことある？　ねえ感じたことある？　一緒にキメてトリップしようぜ。日本人は久しぶりだからよ、俺も燃えたぎっちゃうよ」
　逃げ出そうとするタカ。
　威嚇で銃を撃つロバート。
ポール　「まだ殺しちゃ駄目だよ」
ロバート「分かってるよ。殺されたくなかったらじっとしてな」
ポール　「これマジ凄いんだよ。一回やったら辞められないから。ねえキメよう。ほら。吸ってみな。ね？　吸ってみな。もうどうでも良く成っちゃうから。どうにでもしてって思うから。ね？　吸ってみな。好い加減さっさと吸えやコラ！」
　怖くなって思わず座り込んでしまうタカ。
ロバート「正直に話したら許してやるぞ」
タカ　「正直に話してます」
ポール　「……なあ、どうする？　勘違いみたいだぞ」
ロバート「勘違いだな」
　銃を降ろすロバート。
タカ　「やっと分かってくれました？　もう驚かせないでくださいよ。私は一般庶民

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

なんですからね。このヤクザ！」
ポール　「俺たちはヤクザじゃねーよ」
ロバート「ただの運び屋だ」
タカ　「運び屋？」
その瞬間、効果音とともに燐明とチャンが飛び込んでくる。
ロバートに自動小銃を向ける燐明。
ポールに自動小銃を向けるチャン。
ふいを付かれて身動きがとれなくなるロバートとポール。
燐明　「……そこまでたい」
ポール　「完全に裏切ったなこの野郎」
燐明　「様子がおかしか思て来てみれば、妙な具合になっちょるごたあ。ばってん、燐明が来たからにはもう安心ばい」
銃を構えようとするポール。
燐明　「動けな！」
ポール　「……動けなって何だ？」
燐明　「動けな！」
ポール　「……それはどっちだ？」
燐明　「お前ら何さらしてる。ご主人様に何しくさった」
タカ　「燐明ちゃん。私は大丈夫だよ」
燐明　「うんにゃ。こいつら悪人ズラしてるズラ。こいつらが何かしくさりやがったに違えねえですけえ、事と次第によっちゃあ生かして帰えす訳にはいきもはん。チャン君とタカさんば犠牲にしてでもハチの巣にしてやっつけますキニ、御安心くだしゃいませ、ご主人さま」
タカ　「うん、燐明ちゃん、ありがとう。でもね、ゴタゴタするのはちょっと困るのね。できるなら穏便にすませたいのね。話し合いで解決したいのね」
燐明　「話し合いなんかではなんも解決しませんばい。話せば分かるっちゅう考えが世の中をおかしくしているぞな。ここはチャン君とタカさんば犠牲にしてでもハチの巣にしてやっつけますキニ、御安心くだしゃいませ、ご主人さま」
タカ　「うん、燐明ちゃん、ありがとう。でもね、その犠牲をだしたくないのよ。その犠牲が癌になって社会をむしばみ続けるんだからね。この人たちどうやら私のことをポリスの仲間と勘違いしていたらしくて、その勘違いもなおって、もう大丈夫だからさ」
燐明　「ん？……ガン違いがなおったアルか？（ヘロインを見る）その粉は何じゃ？」
タカ　「これは、えーっと、お薬。気分が悪かったからお薬を貰ったの」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

燐明　「ははーん。昨日、魚食べちょったじゃろ。そりゃガンじゃなかよ、もすかしてコレラかもしれねえずら。いやコレラずら。間違えねえ。これはえらい病気になりもした。コレラはコアラと偉いますばってん可愛くは無いぞな。そげな薬じゃ治らんぞな」

タカ　「話の流れが飛んじゃってるよ」

燐明　「うんにゃ飛んじょらん。誤魔化してもダメばい。タカさんはコレラばい。ばってん、もすかすればマラリアかもしれんキニ。もすかして蚊に食われたならマラリアにきまっとるキニ。マラリアはアライグマじゃないけん、ラスカルでもなか。あと最近は鳥や牛もやばかぞ。そうすっとかなりヤバかけん、医者は無力と相成りましょう。残念ながら医学の力はまだまだ弱わかです。拙者が察するに香港で感染しくさったに違えねえズラ」

タカ　「しばらく外で待っててもらえる？」

燐明　「御意に承り候。しかし希望は持っといてくだしゃい。安静にしてれば大丈夫ですキニ。拙者、早速名医ばあたってみますよって御安心くだしゃいませ、ご主人さま。しからば失礼つかまつり候、ニンニン」

タカが深刻な病状にあることを、チャンに教え去っていく燐明。

燐明　「えらいこっちゃ。えらいこっちゃ」

両手を握りしめて、元気を出すよう、タカに促して去っていくチャン。

チャン　「エロいこっちゃ。エロいこっちゃ」

ポール　「……なんだったんだ」

タカ　「香港でみつけたチャイニーズの通訳の子です。幼いころ日本にいたらしくて、日本語が曖昧なんです。日本のアニメとかの影響もあって、余計なものがたくさん入り込んじゃって、独特の日本語になってて、日本語のガラパゴス化みたいな、そんな感じなんです。まぁそれでもなんとなく意味は通じますし、ここらへんの土地勘もあるし、エレチェ語も話せるのでとても助かってます」

目を合わせ、腹をかかえて笑いだす運び屋。

ポール　「勘弁してくれよ。今回ばかりはもう駄目かと思って観念しちゃったよ」

ロバート「俺も流石に今回ばかりは駄目かと思った」

ポール　「姉さん、脅かさないでくれよ。こっちも危険に怯えながら仕事してんだからよ」

タカ　「それはお互い様です」

ロバート「さっきは怖い思いをさせて悪かったな」

ポール　「やっぱこう言うのって女の方が肝が据わってるものなのかね。俺たちよりも姉さんの方が良い根性してるよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート「それにしても大変な病気にされちゃったな」
タカ　「あの子、通訳と言っても本業は音楽をやっている子なんです。香港からず～っとあんな調子なのでもう慣れてます」
ロバート「彼女はどうやってエレチェ語を覚えたんだ？」
タカ　「四年前にエレチェ族の音楽フェスティバルに出場して、特別賞みたいなものを貰ったそうです。その時に、しばらくエレチェ村にいたらしくて、エレチェ語を覚えたんだって言ってました。私もエレチェ語ができる通訳がみつかるなんて思いもしていなかったから大喜びで、頼み込んで通訳を引き受けて貰ったんです。今回はチャン君と一緒に音楽フェスティバルに出場するって張り切ってます」
ポール　「エレチェ族の音楽って有名なんだな」
タカ　「私の方からも幾つか質問してもよろしいでしょうか？」
　またもや笑いだす運び屋。
ポール　「あんたには負けたよ。お詫びつうか、お礼って言うか、まぁあれだ。その取材とやらをうけてやるよ。いいだろロバート」
ロバート「あぁ、言えない事もあるが、それで良ければ協力するよ」
タカ　「ありがとうございます」
ロバート「ただし録音はやめてくれ。あと、細かい日時と場所の特定は足が付くからふせてくれ」
タカ　「わかりました」
　ポケットからメモ帳とボールペンを取り出すタカ。
ポール　「なんか緊張してきたな」
タカ　「それでは名前を教えて頂けますか？」
ロバート「俺はロバートだ。ロバート・レッドフォード」
ポール　「俺の名はポール。ポール・ニューマン。人はみな豪腕のポールって呼ぶ。誰がなづけたかは分からない。自然とそう呼ばれるようになった。ごめん、やり直させてもらっていいかな。真紅のポールにするわ」
タカ　「何がですか？」
ポール　「やっぱ豪腕のポールよりも真紅のポールの方が良いと思うんだ。豪腕だと力ばっか強くて頭悪そうだからな。真紅だと高貴な感じがするだろう。何か、こう、赤いマントしてますみたいな」
ロバート「赤いマントしてないだろ」
ポール　「してる訳ねーだろ。今の時代に赤いマントなんてしてたら驚きだろ。何の意味があって赤いマントしてるんだよ。俺のイメージだよ。高貴なイメージがほしいんだよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート「狙いは何だ？」
ポール　「知るかよそんなこと。ほっといてくれよ。いいじゃね～かよ別に。うらやましいなら、ロバートはロバートで違うのを考えれば良いだろ。俺は絶対ゆずらないからね。誰がなんと言おうと真紅のポールでいくからね」
ロバート「(タカに) すまない。真紅のポールに変えてやってくれ」
タカ　「えっ？……あの、取材なので、空想の世界ではないので、よろしければ本名を教えて頂けないでしょうか？」
ロバート「それはダメだ。裏世界のルールってのがあって、俺たちもお互いの本名を知らないんだ。ニックネームで呼び合う。それがこの世界のルールだ」
タカ　「あーはいはい。そうかそうか。そう言うの映画で観たことある。なるほど。はー。やっぱマジもんだ」
ポール　「そんなことより変えてくれた？　ちゃんと真紅のポールに書き換えてくれた。大切なところだから頼むよ」
タカ　「はい、ちゃんと書き換えてます。え～っと、それではアヘンは何処まで運ぶんですか？」
ロバート「アジアの麻薬は全て香港に集まる。あんたの言うとおり日本のヤクザも香港で買い付けをしている」
タカ　「取り仕切っているのはチャイニーズマフィアですか？」
ロバート「表向きはそうだ。ただし俺たちは末端の運び屋だから何が表で、何が裏なのかなんて正直分からないんだ。一つ言えることは、アヘンの売買はアヘン戦争の時代から変わることなく受け継がれている」
タカ　「そうなると、イギリスのロスチャイルド家やユダヤ系のサッスーン財閥なんかが今もなお関わっているってことですか？」
ロバート「さぁな。それにしてもあんた詳しいな」
タカ　「そこらへんの下準備はしてきてますから」
ポール「あのさ……ごめん、やっぱ真紅のポールやめるわ。……佐藤正人にしてくれ」
タカ　「佐藤正人ですか」
ポール「そう。佐藤正人。……その、あれだ。俺の本名だ」
ロバート「おい！　何のマネだ！」
ポール　「姉さんに話したいことがあるんだ」
ロバート「そんな事してタダじゃすまねーぞ！」
ポール　「別に良いじゃねーか。それにもう言ちゃったし」
ロバート「いいか、本名を隠すのは俺たちの安全の為だ。どういう伝で足が付くか分からないんだぞ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ポール　「そんな事今更言われなくても分かってるよ」
ロバート「だったらルールは絶対に守れ！」
ポール　「そんな怒んなよ」
　必死にノートに書き込んでいるタカ。
ロバート「素性を調べられて足元を見られたらどうする」
ポール　「心配ねーよ。この姉さんも雑誌に本名を載せるような事しねえよ」
タカ　「それは安心してください」
ポール　「俺が話したいのは俺の過去の事だ。現在のことでも仕事のことでもない。だから話をさせてくれ。俺はただ、姉さんに俺の事を知って欲しいだけだ」
タカ　「私は高田勝子です。タカって呼んでください」
ロバート「そのノートを渡せ」
　しぶしぶノートを渡すタカ。
　受け取ったノートを破り捨てるロバート。
ロバート「ポールの本名と仕事を関連づける記事は絶対にやめてくれ。それだけは約束してくれ」
タカ　「約束します」
ロバート「勝手にしろ」
ポール　「すまない」
タカ　「それではポールさんの過去のこと、教えて頂けますか？」
ポール　「俺、中毒なんだ。ヘロイン中毒。どうしてもヘロインがないと駄目なんだ。だからこの仕事をしてる。この仕事ならヘロインに不自由する事は無いからな」
タカ　「どうしてヘロイン中毒になったんですか？」
ポール　「俺、中学生の時に人を殺したんだよ」
　曲ＩＮ。
ポール　「その日は学校には行かず商店街をブラブラ歩いていた。そうしたら子どもが俺にぶつかってきた。それなのに近くにいた母親は素知らぬ顔をしてやがるんだ。謝りもせず、そのまま走り去る子どもを見ていると無性に腹が立ってきた。こんな社会なんか大地震が起こって潰れればいいと思った。核戦争が起こって人類が滅亡してしまえばいいと思った。子どもの笑い声や歌声が聞こえてこない、そんな場所に行きたかった。……その日の夕方、公園のベンチで寝ていると買い物袋をぶら下げた仲の良さそうな夫婦が向かいのベンチに座った。一緒に夕食の買出しでもしてきたんだろう、幸せそうに笑いあってんだよ。その様子をみていたら無性に腹が立ってきた。むかむかして苛立たしさを抑えられなくなった。気が付いたら男をナイフで刺していた。刺したナイフを引き抜くと血が噴き出して辺りは真っ赤に染まった。隣に座っていた女

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

が悲鳴を上げたので俺は女の喉元にナイフを突き刺して、そのまま走って逃げた。……家に帰ってＴＶをつけたら俺の事件をニュースでやっていた。その夫婦は病院に運ばれて死んでしまったと言っていた。それを聞いて現実感はなかった。夢のなかにいるような気分だった。……翌日、警官がやってきて俺はパトカーに乗せられた。裁判になって、そこで難しい名前の病気だと言われた。俺は医療少年院に入れられて治療することになった。それから六年後、医療少年院での治療を終えて自宅に戻った。そこにある筈の自宅はなくなっていた。両親は新興宗教に入信して施設で共同生活していた。俺はそんな所に行く気はなかった。保護司の紹介で製本工場に勤めた。その頃からだ。……夜眠れなくなった。……あの夫婦の顔が現れては消え、現れては消え、俺を苦しめはじめた。……罪の重さに心が耐えらなくなった。……感情が押しつぶされた。……感情の無かった俺の心に……感情が湧いてきやがった。……申し訳なくて……申し訳なくて……死にたくて……死にたくて……でも死ねなかった。……だからこの仕事をしている。……この仕事なら……ヘロインに……不自由しなくて済む。……ヘロインで……心の安定を……なんとか……保っていられる」

震える手でポケットから古びたバッチを取り出すポール。

ポール　「これ貰ったんだ。医療少年院に居た時会いに来た。俺が殺した夫婦の子どもが。六歳くらいの女の子だった。仇を討つから目印にもっとけって。私が貴方を殺すから目印にもっとけって。そう言われた。これが俺の過去だ」

タカ　「……」

ポール　「すこし……すっきりした。……俺の話を……聞いてくれて……ありがとな」

体が震えているポール。

タカ　「私はヘロインをやっているポールさんが……好きです。そっちの方が、とても人間らしくて……好きです。来ますかね、その女の子」

ポール　「もう十年以上前の話だ。それに俺、日本に居ねーから」

タカ　「会いたいですか？」

ポール　「会ったら殺されるけどな。正直言うとな、俺を支えてくれているのは……このバッチなんだ。ヘロインじゃなくて……このバッチなんだ。このバッチが……俺を死なせてくれないんだ。……これが……このバッチが……俺の十字架だ」

タカ　「佐藤正人。その名前、絶対に忘れません」

ロバート「俺も覚えとくよ。佐藤正人」

ゆっくり暗転。

チャンにサスが入る。

チャン　「僕たちの村は山深く、緑深い辺境の地にあります。村は国境沿いにあって地図のうえではラオス人民民主共和国に属しています。そのラオスはインドシナ半島の

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

中央に位置し、エレチェ族も含め全部で四十七の異なる民族集団があります。それぞれの少数民族は、それぞれ独特の文化や言語を持っており、僕たちエレチェ族は国家と少し距離を置いて生活しています。気候はモンスーン気候と呼ばれるもので、十一月から二月まで乾季となり、涼しくて過ごしやすくなります。三月に入ると急激に暑くなって最高気温は４０℃にまで達します。四月と五月には集中豪雨があり、その後は雨の日と曇りの日が続く、湿気の多い雨季になります。タカさんたちがエレチェ村に来たのは、そんな雨季が終わろうとしていた頃でした。これまでになくたくさんの日本人がエレチェ村を訪れてくれました。これも全て神エレチェのお導きだったのでしょう。全能の神である、エレチェの」

暗転。

○場　エレチェ村（ステージ）

明転。

エレチェ族の人びとが楽器を弾きながらステージをつくっている。

そこにタブレットを見ながら歩いてくるゆき。

その後から同じタブレットを持ってついてくる緒形。

緒形は腹の調子がとても悪く、腹を必死に押さえている。

ゆき　「そこ左です」

左に曲がる。

ゆき　「で、次、右です」

右に曲がる。

ゆき　「これ細かくて便利ですね」

緒形　「米軍のやつを借りてきたからね」

ゆき　「ネットにしてもナビにしても元々は軍事技術ですもんね。世の中を便利にしているのって古代の時代から軍事技術なんですよね。そう考えると人って争うことで進歩してきた生きものなんだなってわかります。自動通訳機みたいなものはなかったんですか？」

緒形　「使えそうなのはなかったね」

ゆき　「エレチェ族にはラオ語もラオス語も通じないそうですよ」

緒形　「身振り手振りで何とかなるよ。ゆきちゃん、ちょっと、ごめん」

林の中に入っていく緒形。

エレチェ族の軽いアンサンブルが始まる。

それを聴き終え、拍手するゆき。

そして写真を差し出して、なんとか話を聞こうとする。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

言葉が通じないためうまくコミュニケーションがとれない。
ゆき　「まいったな、全然通じないや」
エレチェ族の人びとは困った表情をし、その場を去っていく。
ゆき　「やっぱ通訳がいないと厳しいな」
林から股間を葉っぱで隠した全裸の緒形が戻ってくる。
ゆき　「緒形さん、どうしたんですか？」
緒形　「ごめん。それよりもゆきちゃん、大きめの服って持ってる？」
ゆき　「持ってますけど、どうしたんですか？」
緒形　「獣道でウンコしてたら革命軍が現われてさ。その服貸してくれる」
ゆき　「革命軍ってなんですか？」
緒形　「そう言う輩が居るんだよ。革命軍を気取った盗賊がさ。服貸して貰える」
ゆき　「どう言うことですか？」
緒形　「俺たちの心には神が宿っている。さあ正義の革命に協力するんだっとか言って、銃を持った奴らに囲まれて全部盗られちゃった。その服貸して貰えないかな」
ゆき　「全部盗られたんですか？」
緒形　「うん。おそらく隙ができるのを狙って襲ってきたんだよ。卑怯な奴らだよ。ウンコしているところを襲われたからさ、もう素直に言うこと聞くしかないじゃない。それより服はどうしたのかな」
ゆき　「ケガはありませんか？」
緒形　「抵抗しなかったから大丈夫だよ。あいつ等が欲しいのは金と物だからね。素直に言う事聞いてれば服は取られても命までは取らないよ」
ゆき　「これからどうしましょう？」
緒形　「取り敢えず、何か着ましょう」
ゆき　「まず大使館に連絡するべきですね」
緒形　「まず何か着るべきですね」
ゆき　「今から行きますか？」
緒形　「そうだね。ただこの格好で大使館まで行くのはどうかなって思うんだよね。途中で色んな人たちに見られるよね。みんな何であの人全裸なんだろう？　もしかして変態？って思うよね。まあ割り切ちゃえば良いんだけどね。これが俺の股間だ！　俺の股間を見ろ、みたいに。むしろ変態さをより一層アピールする為に股間に様々な装飾を施してね。いじってみました。股間を！みたいな。この際、俺の名前も股間マンにしちゃおう。道ゆく人に、どうも股間マンですって挨拶してね。俺は良いんだ。俺は別に良いんだよそれでも。ただゆきちゃんは恥ずかしいと思うんだ。一緒に歩いてる男が股間に様々な装飾を施してたら、ゆきちゃんは恥ずかしいと思うんだ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ゆき　「はいはい。そんなムキにならないでくださいよ」
緒形　「だってわざとでしょ」
ゆき　「まず状況を聞いて分析する方が先決です。女ものですよ」
緒形　「何でも良いよ」
　女物服を渡すゆき。
緒形　「ありがとう。ウンコしているところを見られた恥ずかしさで、怖さは感じなかったけど、まったくもって参っちゃたよ」
ゆき　「どんな奴らでした？」
緒形　「顔は布で隠してたからよく分からなかったけど、十人位でみんな自動小銃を持ってた」
ゆき　「パスポートをどうにかしないとマズいですね。大使館で事情を説明して、警察署に被害届出して、カード会社と保険会社に連絡して……ぷっ！（笑）」
　女物の服をきると、ピチピチになっている緒形。
緒形　「笑うなよ。で、運び屋の情報は？」
ゆき　「写真見せてまわったんですけどまったく駄目でした。なんかですね、エレチェ族の人たちステージみたいなのをつくってて忙しそうなんです（笑）」
緒形　「あっ、エレチェ祭だ」
ゆき　「エレチェ祭？」
緒形　「ホテルで会ったラオ族の人が言ってたんだけどさ、エレチェ族ってのは音楽を神として信仰してるらしいんだ。その信仰の証として音楽フェスティバルを開催してるんだって」
ゆき　「そう、それですよ。楽器で音合わせしていました」
緒形　「そうか。せっかくここまで来て申し訳ないけど一旦引きあげよう。取り敢えずホテルに戻ってあれしてこれして、そのまえにあれしてこれして、やっぱあれとこれして、あ～めんどくさいな～。やることが多すぎて頭がパンクする。今になってようやく怒りが湧いてきた。あいつらどう言う育ち方してんだよ。この地域に道徳は無いのか。むっちゃめんどくせー」
ゆき　「そうですね。ぷっ！（笑）」
緒形　「笑ってないで戻るよ」
ゆき　「はい。ほんとうにひどいですね。ぷっ！（笑）」
　緒形とゆきが去る。
　風の音。
　緒形が襲われたのと同じ茂みから声がする。
ポール（声）「他に道ねえのかよ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート（声）「安全の為だ」
タカ・オモーラ・運び屋たちが茂みから出てくる。
ポール　「それにしたって獣道はないだろ。なんかベチャベチャしたもの踏んじゃったよ。なんだこれ、くっせ～な」
ロバート「動物のウンコだろ」
ポール　「何を食ったらこんなに臭くなるんだよ」
タカ　「誰もいないね。本当に日本人っぽい女の子が来てたの？」
ロバート「あぁ、俺たちの事を色々と聞いていたらしい」
タカ　「もしかしたら燐明ちゃんのことかな。でも燐明ちゃんはエレチェ語が話せるし、エレチェ族と顔なじみだからなぁ～。それにしても燐明ちゃん、どこいちゃったんだろ？　もしかしたらホテルに戻っちゃったのかな」
ポール　「チャンに聞いたら良いんじゃねーの？」
タカ　「チャン君、どこにいるの？」
ポール　「えっ？　ここにいるじゃん」
ロバート「こいつはオモーラだ」
ポール　「チャンじゃないの？」
タカ　「チャン君はもっと歯が出てるでしょ。外国人ってみんな同じに見えるからね」
（チャンとオモーラは一人二役）
（チャンは陽気な性格で、オモーラは真面目な性格）
エレチェ語で会話をするロバートとオモーラ。
ポール　「何て言ってんだよ」
ロバート「祭りの準備で忙しいから今日は間に合わないって」
ポール　「そんなことだろうと思ったよ。宗教相手じゃ脅しも効きゃしねえ」
ロバート「明日の午後までには用意できるそうだ」
ポール　「それも信用できねーぞ」
タカ　「あのさ、この村ってなんか妙な感じがしない？」
ロバート「と言うと？」
タカ　「この村に来てからず～っとね、とても妙な感じがするのよ。なんだろこの感じ？　ず～っと誰かに見られているような、かといって監視されてる訳じゃなくて、見守られている感じがするの。神様の存在を感じるっていうのかな、神様に抱かれているような、そんな奇妙な感じがあるの。うん。やっぱ神様だよ。神エレチェだよ。神エレチェがこの村にいるんだよ」
ポール　「この世に、神様なんていねーよ。神様がいると思わないとやってられないから、いると思い込んでいるだけだ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

タカ　「そうかな？」
ポール　「そうだよ。もしも神様がいたら生まれて直ぐに死んじゃう子どもなんていない筈だし、もっとマシな世の中になってるよ。神様ってのは人類が考えだした社会を安定させるための道具で、心の不安を取り除くヘロインみたいなものだ」
タカ　「それはなかなか興味深い主張だね」
ロバート「明日からエレチェ祭が始まるからそのせいじゃないか。教会とかモスクとかでもそうだが、信仰心って気のようなものになってそこらへんを漂うだろ。エレチャ祭の影響でその気が強くなって神様の存在みたいなものを感じるんじゃないか」
タカ　「エレチェ祭って？」
ロバート「四年に一度のエレチェ族のお祭りだ」
ポール　「その準備が忙しくて俺たちも足止めくらってる」
タカ　「あっ、そっかそっか。エレチェ祭の催しものとして音楽フェスティバルがあるんだね。ようやく点と点が繋がって線になったわ。でもさ、こんな辺境の地に日本人が三人集まるって変だよ。そのうえ日本人の女の子でしょ。信仰心による気とかじゃなくて、神の力でもって導かれているような、それこそ神エレチェの悪戯のようなものを感じるんだよね」
ロバート「日本人ではなくて、日本人っぽい女の子だ」
タカ　「うん、そうだね。それにしたって何しに来たんだろ？」
ポール　「そんなことよりタカさんはこれからどうするんだよ」
タカ　「う～ん、ホテルに戻ってみる。もしも燐明ちゃんを見かけたら町に帰ったって伝えてくれる」
ポール　「あぁ、伝えとくよ」
　オモーラにエレチェ語で話しかけるロバート。
　うなずいているオモーラ。
ポール　「……なんて？」
ロバート「明日までに準備しとけって」
ポール　「……それで？」
ロバート「なんとか間に合わせるそうだ」
タカ　「あともう一つ質問させてもらっても良い？」
ポール　「何だよ？」
タカ　「どうしてロバート・レッドフォードとポール・ニューマンなの？」
ポール　「明日に向かって撃て！って映画知らない？」
タカ　「なんとなく聞いたことはある」
ポール　「ラストさ、ポールとロバートが警察に追われて建物に逃げ込むんだけど包囲

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

されちゃって、それでもかっこつけて突撃して死ぬんだよ。その死にざまに憧れたって訳。あとスティングって詐欺師の映画もあってさ、これもロバートとポールが主演なんだけどマフィアのボスを相手に一世一代の大バクチを企てる訳よ。でね……」

ロバート「それくらにしておけ。映画なんてものは一方的な視点から物事を描いているだけだ。現実は違う」

ポール　「ほら、こんな事言うんだぜ。ロバートが提案した武蔵と小次郎が却下されたもんだからそれを根に持ってんだよ」

タカ　　「武蔵と小次郎？」

ロバート「そうじゃない。現実はいろいろな事が複雑に絡み合っている。他人がつくった物語に影響されているとろくな事にならないぞ」

ポール　「確かにそれは一理あるな」

ロバート「タカさん、途中までオモーラが送ってくれる」

タカ　　「ありがとう。それじゃ、また明日ね」

ロバート「これでお別れだ」

タカ　　「もう会えないの？」

ロバート「あぁ」

タカ　　「だって明日はエレチェ祭でしょ。日本人同士で仲良く楽しもうよ」

ロバート「好い加減にしろ。俺たちは仕事で来てるんだ」

ポール　「そう言う事だ、タカさん」

タカ　　「残念。じゃこれでお別れだね」

ポール　「元気でな」

タカ　　「うん。ポールもロバートも元気でね」

　手を振りながら去るタカとオモーラ。

ポール　「どうぜ暇なんだからもう少し付き合ってやっても良かったんじゃねーか」

ロバート「少しずつ言葉が馴れ馴れしくなってきただろ。ああいうタイプは長くいればそれだけリスクが高くなる。どこかで線を引いておかないと油断して思わず情報を漏らしてしまう」

ポール　「そうだな。……さっきはごめんな。自分でもなんであんな話をしたのか分からないんだ。やっぱこの村変だよ。やっぱ神様がいるような気がしてきた。いやいるよ。こりゃいる」

ロバート「（笑）車を取ってくる」

ポール　「おう」

　茂みの中に消えるロバート。

　適当な場所を見つけて座るポール。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

遠くから聞こえてくる演奏。
舞台が幻想的な感じになる。
そこに神エレチェが現れてポールに微笑みかける。
しばらくして神エレチェが消える。
ポール　「……こりゃヘロインのやりすぎだな」
走ってくる燐明とチャン。
燐明　「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」
チャン　「エロいこっちゃ、エロいこっちゃ」
ポール　「（チャンを見て）そう言われれば確かに歯が出てるな」
燐明　「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」
チャン　「エロいこっちゃ、エロいこっちゃ」
ポール　「おう、おう。リンリンちゃん、じゃなくて、カンカンちゃんじゃなくて。あっそうだそうだ、ファンファンちゃん」
燐明　「（チャンに）ファンファンちゃん？」
首を振るチャン。
チャン　「（燐明に）ファンファンちゃん？」
首を振る燐明。
ポール　「タカさん先に帰ったぞ。町に帰ったよ。タカさんは帰った」
燐明　「うわ～こりゃしもた～～～。一足、二足遅ればとった～～～。だから安静にしておれと言ったキニ。言葉が足らんやったもんね。安静とアンコロモチと間違えたんやろね。アンコロモチは食べ物やからね。何処かで貰える思て探しまわっとるキニ。こりゃ拙者の説明ば足らんやったー。お主もお主ですバイ。せっかく高性能タブレットば貰ろうて、よか病院ば探しよる時にウロウロさせたらいかんキニ。新型肺炎は新幹線とは違いますばってん、はよ家に帰れる思たら大きな間違いぞな。乗車券は拝見されないぞな。新型肺炎は心底廃人でも無かぞ。何ですか心底廃人って。どれほど引きこもっとるとですか。まっこと遺憾ですキニ。そげなことしよったら病原菌ば広まって、まっこと皆おっちぬとですよ。わしゃ～あんたに対して遺憾の意を表明しますキニ」
ポール　「あのね、ファンファンちゃん」
燐明　「リンメイじゃ」
ポール　「あー、リンメイちゃんか」
燐明　「御主は誰じゃ。名を名乗れ」
ポール　「俺はポール」
燐明　「ポールって……柱か？　棒か？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ポール　「あ～佐藤だ。佐藤正人」
燐明　　「佐藤正人」
　ジープが停車する音。
ポール　「そう。佐藤正人。あのね、リンメイちゃん。タカさんは病気でもなんでもないぞ。いたって健康そのもだぞ。だから心配しなくても大丈夫だからな。わかったか？わかったかな？」
燐明　　「えらいこっちゃ、えらいこっちゃ」
チャン　「エロいこっちゃ、エロいこっちゃ」
　立ち去る燐明とチャン。
　そこにやって来てくるロバート。
ロバート「なんか騒がしかったな」
ポール　「今さっきリンメイちゃんが居たからタカさんが先に帰ったって伝えた」
ロバート「そうか。じゃー行くぞ」
ポール　「あぁ」
　風の音。
　ポールがふっと立ち止まる。
ロバート「どうした？」
ポール　「なぁロバート。有難うな、色々と」
ロバート「どうした。さっきから妙だぞ？」
ポール　「別に何でもねえよ。あのさ、一つ頼みがあるんだけどさ。もしも俺が死んだらこの村に埋めてくれねーか。この村のこの場所に埋めてくれ。誰にも知らせずにそっとな」
ロバート「死ぬのか？」
ポール　「違えーよ。もしものときだよ。この村の雰囲気が好きなんだよ。頼んだぞ」
ロバート「考えておく（歩き出す）」
ポール　「考えておくってなんだよ」
　暗転。
　ジープが走り出す音。
　ゆっくりサスが入る。
　そこにはタカが立っている。
　タカの語り。
タカ　「エレチェ村にトイレはなかった。大人は茂みなど人目のつかない所で用をたす。その手には石や棒を持っている。家畜の豚がついてきてここぞとばかりに襲ってくるからだ。一匹なら対処できるが、複数ついてくると手に負えなかった。背中を見せる

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

と襲ってくるので用をたしながら回転し、石や棒で威嚇する。人糞を争うように食べている豚の姿を見て襲ってくる目的がわかった。……子どもは家のなかで用をたしてしまう。もちろんくさい。風の流れが少し変わっただけで途轍もない悪臭が辺りに漂う。そのため村そのものが相当に不衛生であり、病気の者もたくさんいた。村そのものが病気と死に覆われているといった感じだった。それが幼い頃から慣れ親しんだこの村の日常風景であり、村人たちは汚い方が安心するそうだ。……少し離れた地域には首狩り族もいた。そのような行為は政府に禁止されている。それでも毎年１０人くらいの犠牲者がいた。村長の話では一年前に刺青を入れた日本人が近くの村に住んでいて、毎日のようにヘロインを吸っていたそうだ。その日本人は村人たちを脅して暴力をふるっていたので首狩り族に寝首を狩られて殺された。首狩り族は無差別に首を狩るのではなく、狩るべき人を狩るのだと村長は教えてくれた。そのようにしてこの地域の秩序は守られているのだ」

○場　ホテルのテラス

明転。

出入り口の近くに椅子とテーブルが置いてある。

その椅子に座って調べ物をしているゆき。

そこにタカが携帯電話を手にやってくる。

タカ　「どうしてこう政府の役人ってのは頭が固いかね～！　だからエレチェ村に日本人の女の子が来てたの。おかしいでしょ。そんな村に日本人の女の子が来るなんておかしいでしょ。だから入国情報をちょこちょこって調べてくれれば済むんだって。……だから至急知りたいからこうやってお願いしてんだろーが！……もう頼まねーよこのクソ役人が！」

通話を連打して切るタカ。

タカ　「どんだけ役立たずなんだよ。マジで融通が利かねーな」

腹を立てながら椅子に座るタカ。

ゆき　「それ私です」

タカ　「はっ？！」

会話の流れのままで少しキレ気味のタカ。

気圧され声が小さくなるゆき。

ゆき　「エレチェ村にいたの私です」

タカ　「はっ？！」

ゆき　「それが何か？」

タカ　「ごめんごめん。いろいろいっぺんに来たから驚いちゃった。え～っと、何処か

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

で私と会った事ある？」
ゆき　「いえ」
タカ　「そうだよね。ごめん。まあ良いや。どうしてエレチェ村なんかにいたの？」
ゆき　「話せば長くなるんですけど日本人の運び屋を探してました」
タカ　「やっぱりね。そうじゃないかと思ったんだ」
ゆき　「日本人の運び屋を知ってるんですか！」
タカ　「さっきまでエレチェ村で一緒だった」
ゆき　「エレチェ村にいるんですか！」
タカ　「さっきまでいたけどもうどっかいっちゃった」
ゆき　「どっかってどこですか。どこにいったんですか。どこですか！」
タカ　「それはわからないな」
ゆき　「見当はつかないですか。ようやく居所を突き止めたんです。このチャンスを逃したら何時会えるか分からなくなります。お願いです。だいたいで良いのでどこらへんか教えてください」
タカ　「どこかまったく見当がつかないけど、仕事が残ってるから明日もエレチェ村に来るよ」
ゆき　「それは本当ですか」
タカ　「本当だよ。間違いなく必ずくる」
ゆき　「（ほっとして）間に合った～」
タカ　「名前は？」
ゆき　「あっ、すいません。鈴木ゆきです」
タカ　「私は高田勝子。……あのね、ゆきちゃん。私は事件の話を運び屋である、その本人からすべて聞きました」
ゆき　「すべてですか？」
タカ　「うん。自分の事を知って欲しいって言ってね。話をきいてからずっと妙な予感がしていたの。こうなるんじゃないかって予感がしてた。そうしたらやっぱりこうなった。点と点が繋がって線になった。だからなにもかも知っています。その運び屋はゆきちゃんに会いたくて私に話をしたんだと思う。私を使って事件に終止符を打とうとしている。だから余り感情的になるのはどうかと思うの。その運び屋は今では人間らしい心を取り戻してる。確かに親族の死はとても辛いことだと思う。痛ましい事件で辛かったと思う。私に同じ不幸が訪れたら一生立ち直れない気がする。でもね、その、殺すとか殺されるとかじゃ、解決できるものも解決できなくなると思うの。そうじゃなくて、その運び屋と話をして欲しいの。その運び屋と会話をして欲しいの。そうすればまた違った感情が湧いてくると思うの。私も何言ってるか分かんないんだけ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ど感情的にならないでほしいの」
ゆき　「私も話が聞きたいだけです。どうしてそうなったのか、事件の真相を知りたいだけです」
タカ　「そう。ならよかった。それなら明日、私が運び屋に会わせてあげる」
ゆき　「ありがとうございます！」
タカ　「うん。任せて。ゆきちゃんまだ若いんだし、これからなんだから、何時までも引きずってちゃいけない。こういうのってどこかで終わりにしないといけない。うん、これで終わりにして前に踏み出さないとねっ（肩を抱く）」
ゆき　「私もそう思って此処まで来たんです」
タカ　「だけどどうして此処が分かったの？」
ゆき　「壁からメモが出てきたんです。そのメモに運び屋に関する情報と関係各所の連絡先が書いてあったんです」
民族衣装を着てやってくる緒形。
緒形　「おーい」
タカ　「うそ、どうして！？」
緒形　「いたいた。ようやく見つけた。日本人のジャーナリストが泊まるホテルなんてほとんど同じホテルだから、たぶん会うんじゃないかって思ってたんだよ」
ゆき　「もしかしてタカさんですか？」
タカ　「そうだよ」
ゆき　「緒形さんからお話は伺っています」
タカ　「あっ！　援助交際だ。そうそう、どっかで会ったことがあると思ったんだよ。オガタ出版で私とすれ違ったの覚えてない？」
ゆき　「すみません、覚えてないです」
タカ　「そぅ。あ～メモってあの時のメモだ。ある殺人事件の件でって。あ～はいはい。なるほどね。点と点が繋がって線になりました」
ゆき　「タカさん、運び屋に会ったそうです」
緒形　「マジで？」
ゆき　「マジで。明日、運び屋に会わせてくれるって」
緒形　「（タカに）マジで？」
タカ　「マジで」
緒形　「良くやった。大手柄だぞ」
タカに抱きつく緒形。
タカ　「もう。社長が興奮してどうすんの。こういう事件は冷静にならないと」
緒形　「なぁ何処だ。何処なんだ。何処で会わせてくれるんだ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

タカ　「運び屋については私に任せて。折角上手く行きそうなのに社長にぶち壊されたらたまったもんじゃないから」
緒形　「さては俺のスクープを横取りするつもりだな」
タカ　「殺人犯のその後なんてたいしたスクープじゃないでしょ」
緒形　「ゆきちゃん。タカに全部話したの？」
ゆき　「本人から直接聞いたそうです」
緒形　「奴は何て言ってた。何て言ってた。何て言ってたんだ」
タカ　「それよりもどうしてこんなところにいるの。つうかその格好はなに？」
緒形　「それが盗賊に襲われちゃってさ」
タカ　「えっ！　大丈夫？」
緒形　「体は大丈夫だけど持ち物はなにもかも盗られちゃった」
タカ　「どうしてなにもかも盗られちゃってんの？」
緒形　「おなかを壊しちゃってそこを狙われたんだよ。いや～ほんと参っちゃっよ」
ゆき　「緒形さん、私部屋に戻って明日の準備をしてきますね」
緒形　「うん」
　去るゆき。
タカ　「で、どうして社長がこんなところにいるの？」
緒形　「五年前に神奈川県警の麻薬横流し事件ってあっただろ。参議院議員の杉本卓也が県警の押収した麻薬を犯罪シンジケートに横流ししていた事件」
タカ　「証拠不十分で不起訴になった事件だよね」
緒形　「そう。犯罪シンジケートに通じていた容疑者が行方不明になって迷宮入りになった。その容疑者がゴールデントライアングルで運び屋をやってるんだ。それをニューヨークの出版社に話したら取材費の増額が認められたもんで、この機会を逃すべからずって感じで飛んできたって訳。これがその行方不明になった容疑者の写真だ」
　ロバートの写真をみせる。
緒形　「あいつら完全にもみ消しやがって。杉本の野郎は今じゃ聖者のような顔してのうのうと老後を楽しんでやがる」
タカ　「これロバート、運び屋の片割れ」
　ガッツポーズする緒形。
タカ　「どうして居所が分かったの？」
緒形　「メモが出てきたんだ。取引先ルートや関係各所の連絡先が暗号で書いてあった」
タカ　「メモってあの時のメモでしょ」
緒形　「そう。この事件は犯罪シンジケートに通じてた山下康幸がキーなんだ。殺されているとばかり思っていたけど、運び屋をやって生き延びてやがった。ゆきちゃんが

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

メモを持ってきてくれなかったら、それこそ完全に迷宮入りだった」
タカ　「なるほどね。ロバートを探してる緒形さんと、ポールを探してるゆきちゃん。それぞれの線が運び屋に繋がっているのも妙な巡りあわせだよね」
緒形　「探してるのはロバートだよ」
タカ　「緒形さんはね。まぁこれも神エレチェの悪戯、いや神エレチェのお導きなんだろうな。そうでなければ何もかも一緒くたになってこの地に集まるなんてありえないもんな。神様ってほんとうはいるんだな～。いないふりして実はいるのが神様なんだな～」
緒形　「なにを言ってんだ？」
タカ　「いいからいいから。私は神エレチェに案内人として選ばれたんだから。ゆきちゃんと社長を神エレチェのお導きに従って運び屋のもとへご案内するだけです」
緒形　「おぅ、頼むぞ」
タカ　「大船に乗ったつもりで任せてください」
緒形　「で、そっちの取材はどう？」
タカ　「順調だよ。アヘンも吸ってみた」
緒形　「どうだった？」
タカ　「パイプから煙を吸い込んで２０分くらいかな。すッごくリラックスした気分になる。アヘンってタバコよりもどちらかといえばアルコールに似てるね。仕事終わりに晩酌するように軽く一服してさ、風邪もアヘンで治すんだって。日本ではその手のものって何もかも悪になってるでしょ。それって体験したことがなくて分からないから怖くて悪にしてる部分がたくさんあると思った。そうした決めつけが世の中をゆがめている部分もたくさんあると思った」
緒形　「うん。麻薬そのものはそれほど悪い物ではないんだよ。悪いのは麻薬でもなく革命軍でもなく、タカの言うように無知や無経験による決めつけだろうし、それを操って金と権力を得ている奴らなんだ」
タカ　「でもそういうことって記事にしてもなかなか伝わらないよね」
緒形　「人間は自分のまわりが平和ならそれ以外のことは無関心になるものだからね。本来ならマスメディアが正しい情報を適切に報道するべきだけど、やっぱ生きていくためには稼がないといけないからね」
タカ　「ＴＶ局のハゲ上司がそんな感じだった。稼がなくちゃいけないって現実にぶつかっているうちに良い生活ができるようになって、その生活をなんとしてでも守ろうとするから大衆迎合するしかなくて、物事の本質なんてどうでもよくなる」
緒形　「結局、社会が評価するのって地位と名誉と資産だからね。それを求めてしまうのは仕方がないことだよ。だからこそなんとかしたいと思ってオガタ出版をつくった

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

けどなんともならなかった。世の中はそういうふうにできているってことかな」
タカ　「やっぱ大衆迎合しないと食っていくのは難しいか～～～。でも嫌だな～～～。背に腹はかえられなくなっても嫌だな～～～。あ～～～これからどうやって生活していこうかな～～」
　肩を落としてトボトボと歩いてくる燐明とチャン。
タカ　「って燐明ちゃ～ん」
　駆け寄っていくタカ。
タカ　「先に帰っちゃってごめんね」
燐明　「こっちこそすんまそん。拙者の言葉が足らんやったけん勘違いさせてしもたバイ。あんころもちは何処にも無いなり。誰もくれないなり。探しても無駄じゃ。すかも、まっことときつか事ば申し上げねばなりましぇん。気をしっかりもってお聞きくだしゃい。拙者、方々を駈けずりまわって治療方法について調べてまいった。じゃが、じゃがですたい。こうなってしまったからには隔離処置しか道はござらぬ。ご覚悟をきめて隔離処置の道を御進みくださいませ、ご主人さま。拙者、よか地図ばもろたけん、どうかこれで良か病院ば探してくだしゃい。（タブレットを差し出す）」
タカ　「あのね燐明ちゃん。私は癌でもなく、コレラでもなく、マラリアでもなく、とにかく病気ではありません。どこまでも健康そのもので、どこまでも元気なのであります」
燐明　「ほんまでごわすか？」
タカ　「ほんまでごわす」
燐明　「ほんまに、ほんまでごわすか？」
タカ　「ほんまに、ほんまでごわす。ひゃくぱーほんまでごわす」
　体をアホみたいに動かして見せるタカ。
燐明　「おぉぉぉ～～。良かったバイ」
タカ　「心配かけてごめんね」
燐明　「安心したバイ」
　笑いあうタカ、燐明、チャン。
　そこにやってくる緒形。
緒形　「だれ？」
タカ　「私の通訳の燐明ちゃん」
燐明　「よろしこ」
緒形　「よろしこ」
タカ　「でこっちはエレチェ族のチャン君」
チャン「おしるこ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

緒形　「おしるこ」
タカ　「で、この人は社長の緒形さん」
緒形　「おこさま」
燐明　「おこさま」
チャン「おこさま」
タカ　「君達は日本語の可能性を突き詰めているのかな？」
緒形　「（タブレットをみる）それ、俺のタブレットじゃん」
燐明　「これは燐明がもろた品じゃきキニ、燐明のじゃ」
タカ　「誰に貰ったの？」
燐明　「チャン君の友達ですたい」
タカ　「エレチェ族の人？」
燐明　「うんにゃ、革命軍の人たい。エレチェ祭のスポンサーじゃ。メコン河で洗濯しとったら川上からどんぶらっこっこどんぶらこっこと流れて来た言うて喜こんどりましたとさ。あ～めでたしめでたし」
タカ　「革命軍の人、他にもいっぱい持ってなかった？」
燐明　「他にもいろいろ流れてきたそうで、服とか色々持っとったぞ。こりゃ～神エレチェからの贈り物じゃき、音楽フェスティバルの商品にする言うとりましたとさ。あ～めでたしめでたし」
タカ　「燐明ちゃん。それ社長のなの、だから返してあげて」
燐明　「うんにゃ。これは燐明が頂いた品ですばってん、社長さんには返さんぞなもし」
タカ　「そこを社長に返してあげて」
燐明　「社長さんには返さんぞなもし」
タカ　「でも社長に返してあげて」
燐明　「社長さんには返さんぞなもし」
緒形　「タカ、もう良いよ。どうせ一度は盗られたんだし、もう返ってこないって諦めてる」
燐明　「社長さんおおきにぞなもし」
燐明に話しかけるチャン。
しばらくエレチェ語で会話。
タカ　「どうしたの？」
燐明　「チャン君がさっきから社長さんをメンバーに入れろと煩いキニ」
タカ　「メンバーって？」
燐明　「音楽フェスティバルずら。エレチェ祭の午前中の目玉ばい。二人じゃキツイばってんメンバー探しとったキニ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

緒形に熱い視線を送っているチャン。
タカ　「社長、チャン君に好かれたみたいだね」
燐明　「社長さんもエレチェ祭に出場するズラ」
タカ　「（緒形に）だってさ」
緒形　「申し訳ないけど、俺そういうの駄目なんだよ」
燐明　「もったいなかー。エレチェ祭は香港でも有名くさかぞ。誰もが一度は出てみたかったみたいな感じぞ」
緒形　「俺、音楽のおの字も知らないから。音楽の授業とかでも笛を吹いてるふりして誤魔化してたくらいだから。楽器はほんと無理だから」
タカ　「よっし、取り戻そう」
緒形　「えっ何を？　固い絆とか？」
タカ　「社長が盗られた物に決まってるでしょ。音楽フェスティバルの商品になっているんだったら、みんなで力を合わせて取り返しちゃおうよ。そりゃまぁ全部は取り返せないにしても、取り返せるものだけでもなんとかして取り返そうよ！」
曲ＩＮ。
緒形　「曲が入ったぞ、おい」
タカ　「私に名案があるの」
緒形　「うわー。名案ってあれでしょ。フェスティバルの商品が台の上の箱とかに入ってて、それをトリックとか使ってスリ替えるんでしょ。ラスト俺たちがしくじったと思わせといて、実はスリ替えてましたみたいな、悪い親玉が悔しがるみたいな、そんなオチとかにするんでしょ。うわー。もしかして知的な方じゃなくて強行強奪の方？銃撃戦とかして敵に囲まれながらも何故か突破してしまって、いやそれは無理だろみたいなやつでしょ。もっと凄いのになると敵をみんな倒して、お前そこまで強いのかみたいなやつでしょ。言っとくけど相手は革命軍だからね。銃を持った奴が何十人も居るんだからね。現実的にそんな展開ありえないから。頼むからやめよう。取り戻すのは固い絆とか友情とか、そういう目に見えないものにしよう。うわー！　しまった。そうかそういう事か。駄目だよ。それは駄目だよ。俺は股間マンなんかじゃないからね。人間のＤＮＡに股間ＤＮＡを組み合わせる事によってつくり出された改造人間・股間マンなんかじゃないからね。ラストで裏切りとかあって股間を撃たれるけど、何時も股間には御守りの硬い物が入っていて、その御守りの硬い物のお陰で助かったと思ったら、その時に限って硬いものが入ってなかったとか、そんなオチないからね。幸にも勃起で固くなっていて助かったなんて、そんな下品なオチはもっとないからね。つうか、あんたら俺が股間マンに変身したら凄い力が出せるとか思ってるんでしょ。それは無理だから。そんなの無理だから。マッハなんかで走れねえから。空も飛べね

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

えから。力も千倍とかにならねえから。そもそも股間スーツなんて無いからね。股間だけが裸で、それ以外は服で覆われてるような股間スーツなんて無いからね。それだと前見えないし、急所丸出しだから。呼んだってロボットなんか来ないよ。いろんな乗り物が合体してロボットにもならないよ。最期に股間の部分に尖った乗り物がガッシって入って、股間ロボ、発進！　とかならないよ。まあ俺自身が巨大化するって手もあるけど。そんな奴見た事無いっちゅうの！　そんな事出来るかっちゅうの！」

タカ　「燐明ちゃん、私ね、ベース弾けるの、これでも大学時代バンドやってたんだ」

燐明　「ほんまか？」

タカ　「私がベースやるから、社長はドラムね。燐明ちゃん。社長がドラムやったらそれ（タブレット）返してくれるよね」

燐明　「それじゃったら仕方なかね」

タカ　「ほら、早速一個返ってきたよ。音楽フェスティバルに出場して取り返せるものだけでも取り返しちゃおうよ」

緒形　「俺が音楽オンチなの知ってるよね」

タカ　「ドラムはコードとかないから。リズムを刻んで叩くだけだから社長にもできるって。チャン君、社長さんドラムやるって」

緒形を強く抱きしめるチャン。

そこにやってくるゆき。

ゆき　「なんだか盛り上がってますね」

タカ　「おぉぉ、ナイスタイミングで現れたね。ゆきちゃん、楽器とか弾ける？」

ゆき　「ギターぐらいでしたら弾けます」

タカ　「よし、決まりだ！」

ゆき　「えっ、何がですか？」

タカ　「みんなで社長が盗られたものを取り返そう！」

燐明　「おっし！　そうと決まれば徹夜で練習するズラ。甘えは許さないズラ。弱音を吐く奴は往復ビンタ。その後腕立て伏せ百回。出来るまで何度でも繰り返す。何時まで経っても出来ねえ奴は皮膚をギューってつねります。たまにグーで蹴ります。もちろん蹴りも入れます。壁に頭つけてガガーってやります。顔面を足で踏んでグリグリします」

タカ　「そこまでしなくても良いんじゃないかな」

燐明　「なんばいいよるとですか。音楽はスパルタばい。音楽をナメたらいかんとです。死ぬ気でやらんといかんとです。そこまですてやっとこさ星ば掴めるとです。掴んでグリグリばできるとです。はい！」

タカ　「なに？」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

燐明　「何やってるか！　気合入れば一緒にやるとです。ついてくるある」
タカ　「よっし。わかった。みんなもやるよ」
燐明　「そこまですてやっとこさ星ば掴めるとです。掴んでグリグリばできるとです。
　はい！」
　燐明と同じ動きで気合入れ。
みんな「そこまですてやっとこさ星ば掴めるとです。掴んでグリグリばできるとです。
　はい！」
燐明　「ぴっちゃーびびってるへいへいへい。はい！」
みんな「ぴっちゃーびびってるへいへいへい。はい！」
燐明　「生ゴミ、生首、生卵、燃えないゴミは燃えるゴミ。はい！」
みんな「生ゴミ、生首、生卵、燃えないゴミは燃えるゴミ。はい！」
燐明　「正直すぎると馬鹿を見るじゃないか。はい！」
みんな「正直すぎると馬鹿を見るじゃないか。はい！」
燐明　「ドングリ虫バンド、イエーイ！」
みんな「ドングリ虫バンド、イエーイ！」
　イエーイ！を言い合うみんな。
　暗転。

○場　エレチェ村（ステージ）
　チャンにサス。
　経典を手に持ち厳格に語る。
チャン「過ごし易い乾季の足音が聞こえてくると、新しい楽器が欲しくなる今日この頃、みなさまいかがお過ごしでしょうか。神エレチェは我々に様々な物をお与えくださりました。大いなる大地、果てしない空、感じる言語、そして響き渡る音楽。いにしえの記録によるとこの地に神エレチェが降臨してきました。そして集まって来た民衆の前で天地万物の創造者であられる神エレチェはおしゃいました。（経典を読む）天地万物って何？……あっそ、でも天地万物なんてつくれねぇから。そんなもんつくれねぇから。だいたいお前ら誰だよ。（皆に語りかける）全知全能であられる神エレチェはおっしゃいました。（経典を読む）全知全能って何？……ふーん。正直、な～んも知らないです。よく分からないです。だからお前ら誰だよ。（皆に語りかける）そして神エレチェはおしゃいました。（経典を読む）俺違うから。俺そんなんじゃないから。これ要らないからあげる。（皆に語りかける）そう言い残し民衆にお与え下さった品、その品こそエレチェ族に代々伝わるイニシエの楽器です。（奇妙な形をした古めかしい楽器を掲げる）神は己を神とは決して申されませんでした。神エレチェの信

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

仰を広く世界に伝えることも許しませんでした。その正体を明かすことなく楽器のみを与え、こうして音楽を残していかれたのです。その音楽は言葉の壁を越えて世界中に広がっています。すべてを司る神エレチェを祝う音楽の祭典、エレチェ祭。そのトップバッターを飾るのは日本から来たこのバンドだ。ドングリ虫バンド with チャンタサック！」

ドラムの合図と供に爆音が響き渡る。

ボーカル燐明を中心に凄まじい演奏。

激しいノリで凄くイケてる。

パフォーマンスにも凝っている。

曲が終了し、割れんばかりの大歓声。

燐明　「おおきに！」

みんなガッツポーズ。

暗転。

○場　エレチェ村（外れの山道）

遠くをみつめているタカ。

そこにやってくるゆき。

ゆき　「こんな所で何をしてるんですか」

タカ　「美しい景色を眺めてた」

ゆき　「自然が近いですよね」

タカ　「近いね。こうやって大自然のなかにいるとさ、つくづく自分はちっぽけな存在なんだって思う。あのメコン川の流れが歴史の流れみたいなもので、私の存在なんて流れのなかの一滴でしかないんだよね。あ～ちっちゃいちっちゃ。私なんてほんとちっちゃい。でもちっちゃいからこそ何でも出来ちゃう。ちっちゃいからこそやりたいことをやらないと損だと思う。いや～フェスティバルめっちゃ楽しかったねー。燐明ちゃん日本でバンド活動してくれないかな。そうだ、後で聞いてみよう。そうなったらゆきちゃんもどう。ねぇ一緒にやらない？」

ゆき　「タカさんって良いですね」

タカ　「何が？」

ゆき　「人生を楽しんでますってのが溢れてて」

タカ　「社長にもよく言われる。タカは楽しそうで良いなって。……あのさ、運び屋の件なんだけどさ、私にちょっと任せてもらえないかな。ナイーブな話だけに慎重に進めたいんだよね。運び屋の方も精神的に参っているからさ。まず私が話をしてそれからゆきちゃんに会わせたいんだ。申し訳ないけどそうさせてくれないかな。運び屋に

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

は必ず会わせてあげるから私を信じて待っていてもらえないかな。どうかな。そうさせてもらいないかな」

ゆき　「そうですね。私が突然現れたら驚くと思うのでタカさんにお任せします」

タカ　「ゆきちゃん、ありがとう」

ゆき　「緒形さんは？」

タカ　「社長は燐明ちゃんに引っ張られて出店をまわってる。私一人じゃやっぱ不安かな？」

ゆき　「いえ。だってタカさんはなにもかも知ってるんですよね。事件の核心と言うか、真実について」

タカ　「本人から直接聞いたからね」

ゆき　「じつは私、緒形さんに真実を話してないんですよ」

タカ　「だろうね。なんか話しがかみ合わなかったから」

ゆき　「すべて解決したら話そうと思います」

タカ　「うん。ゆきちゃんは社長とどうやって知り合ったの？」

ゆき　「私、月間オガタのファンだったんです。それで会社に手紙を送ってそれからの付き合いです」

タカ　「同じ同じ。私もファンだったの。大学生の時に初めて月間オガタを読んでピッピッって来たんだよね。これだって思ってさ。緒形出版に押しかけて無理やりバイトで雇って貰ったんだ」

ゆき　「ありえない雑誌でしたからね」

タカ　「ありえない雑誌だったね。日本人ってほぼ同一民族だから価値観がみんな同じで、みんな同じことに興味があって、みんな同じことが好きで、空気みたいなものに流されやすいでしょ。月間オガタってそういうのをあからさまに馬鹿にしてて、それがたまらなく痛快だったんだよね」

ゆき　「よくわかります」

タカ　「でもさ、私達の仕事って人気商売だから空気みたいなものに抵抗しているとお金にならないし、そこがとても難しいところなんだよ。とくに月刊オガタはタブーに突っ込みすぎてスポンサーがなかなかつかなかったからね。横槍も多くて資金繰りが上手くいかなくなっちゃったみたい」

ゆき　「私、バックナンバー全部持ってますよ」

タカ　「私だって持ってるよ。あっ、ゆきちゃんアレ持ってる？」

ゆき　「何ですか？」

タカ　「じゃーん。月間オガタ特製キーホルダー」

キーホルダーを出す。（別にキーホルダーで無くても可）

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ゆき「あっ！　それ応募したけど当たらなかったんですよ」
タカ「私、パクったから持ってんだよね」
ゆき「私に下さい」
タカ「何言ってんの。駄目だよ」
ゆき「良いじゃないですか、下さいよ」
タカ「駄目だって」
ゆき「減るもんじゃ無いんですから」
タカ「無くなるちゅうに」
ゆき「下さいって」
タカ「駄目だって」
　もみ合う二人。
　そこにやってくる緒形。
緒形「こんな所にいやがった。散々探しまわったぞ。二人で何してんの？」
ゆき「タカさんケチなんですよ」
タカ「（緒形に）何でもないの。（ゆきに）私のもんでしょ」
ゆき「だってパクったんですよね」
タカ「（小声で）シー、黙ってて。ほんとにもう」
　しぶしぶ渡す。
ゆき「うっし！」
タカ「もしかして自己中かな？」
緒形「ほら、パスポート返してもらったよ。あとクレジットカードも返してくれた。
　いや～マジで助かったよ」
タカ「お礼はチャン君に言ってね」
ゆき「チャン君って偉いんですね」
タカ「ああ見えても此処ら辺を仕切ってる麻薬商人だからね。革命軍の奴らがペコペ
　コしてたからなかなかのもんだと思うよ」
ゆき「そんなふうには見えないですけどね」
緒形「あいつメモの事何か言ってなかった」
タカ「メモってあのメモ？」
緒形「うん。それも取られちゃったんだよ」
ゆき「もう無くても良いんじゃないですか」
緒形「そうだな。もういっか」
　慌てて走ってくるチャン。
チャン「エロいこっちゃ、エロいこっちゃ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

タカ　「チャン君、そんな慌ててどうしたの？」
緒形　「チャン君、取り戻してくれて有難う」
　　そのまま通り過ぎる。
ゆき　「言葉が通じないのはほんと不便ですね」
緒形　「運び屋は此処を通るのか？」
タカ　「うん。でも何時来るかは分かんないんだよね」
緒形　「しかしよく取材できたもんだよな」
ゆき　「タカさん、凄いです」
タカ　「まあね。この仕事は私の天職だからさ」
緒形　「運び屋の取材なんてそう簡単にできないぞ」
ゆき　「タカさんジャーナリストの才能ありますよ」
タカ　「うん、才能あるズラ。おいはあの星ば掴むとです。掴んでグリグリばするとです。ヘイヘイヘイ。凄腕ジャーナリストタカ参上！」
　　やってくる燐明。
燐明　「勝手にパクるでない！」
緒形　「本家本元」
燐明　「なんばしよっとですか。待てども待てどもいっこうに来やせん。おそか思て来て見れば燐明のネタば妙なパクり方しおる。まっこと遺憾ですキニ」
タカ　「ごめんね」
燐明　「悪人ズラした奴らは来たズラか」
タカ　「まだ来ないよ。それよりもチャン君がステージの方に慌てて走っていったよ」
燐明　「先ほど革命軍の人と怪しげな話ばしとったけん。怪しげな事をしよるとでしょう。ほっとけば良いキニ。そげなことより、ゆき何しくさっとる。ゆきもコブラ叩きゲームやるズラ。ゆきもコブラ叩くズラ」
ゆき　「じゃ～タカさん、私、ちょっと行ってきますから、その時がきたら呼んでください」
タカ　「ありがとう。本当にありがとう。運び屋が来たら私が責任持って連れて行くから待っててね」
緒形　「俺も此処にいるから大丈夫だよ」
燐明　「早くするズラ。コブラ叩きゲームやるズラ」
ゆき　「ちょっとだけ楽しんできます」
　　そのまま立ち去るゆきと燐明。
緒形　「連れて行くことになったの？」
タカ　「そう。まず私が運び屋と話をしてからゆきちゃんに会ってもらうことにしたの。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ひとつクッションを入れた方がお互い感情的にならずに済むと思ってね」
緒形　「たしかにそのほうが賢明だな。タカにしては珍しく気が利くじゃないか」
タカ　「なにそれ。私はいつも気が効きますよ」
緒形　「それは失礼しました」
タカ　「ところでコブラ叩きゲームってどうやるの？」
緒形　「そのまんま、ピコピコハンマーでコブラを叩くんだよ」
タカ　「それって危なくないの？」
緒形　「一見危ないんだけど、実際やっても危ない」
タカ　「危ないんじゃん」
緒形　「そう言う事になるね」
タカ　「大丈夫なの」
緒形　「一応ワクチンは用意されてるから」
タカ　「そのゲーム命がけだね」
緒形　「それがスリルなんじゃない」
タカ　「何処でやってるの？」
緒形　「村の中心に大きな木があっただろ、あの木なんの木みたいな」
タカ　「ああ、あの木なんの木みたいな」
緒形　「その根元でやってる」
タカ　「そっか。あのさ、ちょっとどうでもいい話をしてもいい」
緒形　「なんだよ。どうでもいい話って」
タカ　「私がバイトしてた頃の社長、メチャメチャかっこ良かったよ」
緒形　「突然なんだよ。それにかっこ良かないよ」
タカ　「かっこ良かったって」
緒形　「かっこ良かないよ」
タカ　「かっこ良かったって。でもさ、かっこ良かったのって不安定だからかっこ良かったんだよね。ギラギラしててガツガツしてて、なにも考えずに突っ走ってる感じだった。前へ前へ突っ込んでいって危なっかしくて仕方がなかった。でも社長、結婚してから変わちゃった気がする。安定を求めるようになって危なっかしさがなくなった。ただのおっちゃんに成っちゃった」
緒形　「タカは相変わらず直球を投げてくるよな。子どもの頃ってさ、将来こうなりたいとか色んな夢を持ってるだろ。その為に若い頃って必死に頑張るんだけど、そのうちこんなんで良いのか、こんな筈じゃ無かったって思うんだ。だから必死にバタバタしてみるんだけど幾らバタバタしても現状からは抜け出せなくて同じ所をグルグルまわってるだけ。結局さ、社会には需要と供給のバランスがあって、どれほど良い記

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

事を書いても人気がなければ埋もれてしまう。才能や努力なんかじゃ越えられない壁がある。まあ俺の人生こんなもんなんだろうなって思う」

タカ　「……長い間お疲れ様でした」

緒形　「初めてそんな言葉聞いたな」

タカ　「だけど私は負けませんよ」

緒形　「俺も別に負けた訳じゃないぞ。第二の人生の始まりだからな」

タカ　「物は考えようだね。おっとまたもや要らん一言を言ってしまった」

緒形　「そういうなよ。こうやってロバートをおっかけてゴールデントライアングルまでやってきたんだから、前の俺ほどじゃないにしてもまだまだギラギラしてるぞ」

タカ　「そうだね。私がポールと話をつけるから社長はロバートと話をつけてね」

緒形　「ポールと話をつけるってなんだよ」

タカ　「いいから。社長は状況をちゃんと把握出来てないんだからポールの件は私に任せて口をださないでね」

緒形　「ロバートだって」

タカ　「もう、めんどくさいなー」

緒形　「うわっ、タカがどうでもいい話をするからまたきやがった」

タカ　「そうやって人のせいにして。虫とか爬虫類とかなんでもかんでも食べるからでしょ」

緒形　「ちょっとごめん」

崖下の茂みに入っていく緒形。

タカ　「ゆきちゃん、真実を言ってないんじゃなくて、こりゃ嘘を並べまくってるな」

そこにやって来る運び屋。

笑顔で手を振るタカ。

タカ　「お～い、こんにちは」

ロバート「(怒) こんな所で何してるんだ」

タカ　「ちょっと用事があってね」

ロバート「(怒) 昨日これでお別れだと言った筈だ」

タカ　「そう怒らないで」

ロバート「こいつ俺たちを友達かなんかだと思ってやがる」

ポール　「ロバート。ちょい待ってくれ。タカさんは俺に用があるんだ。そうだろ？」

タカ　「うん」

ロバート「ポール。お前昨日からおかしいぞ。ヘロインの……」

ポール　「(さえぎって) 今日はやってねえよ。しらふだ。(タカに) あの子の事だろ。あの子が、俺が殺した夫婦の子どもが、来てるんだろ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

タカ　「知ってるの？」
ポール　「タカさんと別れた後会ったんだ。すぐには分からなかった。でも何となく面影があった」
タカ　「そっか、あの子も昨日此処に来てから。あの子ね、ポールを殺す気はないの。話がしたいだけだって。だから話をして欲しいの」
ロバート「どうして黙ってた」
ポール　「これは俺の個人的な問題だからさ。俺、いかなきゃなんね～から、アヘンの方は頼むわ」
ロバート「俺も行こう」
ポール　「子どもじゃねーから、それは勘弁してくれ。いつも迷惑かけてすまないな」
ロバート「いいか。絶対に死ぬな」
ポール　「俺が死ぬ訳ねーだろ。心配するな」
ロバート「予定通りに移動しているから戻ってこいよ」
ポール　「あぁ。俺、行ってくるわ。（タカに）案内してくれ」
タカ　「うん」
立ち去るタカとポール。
ロバート「……」
崖下の茂みへと銃口を向ける。
ロバート「Come out」
手を上げて出てくる緒形。
緒形　「さすがは元麻薬取締り捜査一課ですな」
銃を降ろすロバート。
ロバート「緒形さんか？」
緒形　「久しぶりだな、ロバートさん」
ロバート「そんな所で何してんだ」
緒形　「ちょっと腹がね」
ロバート「（笑）そういえば昔から腹が弱かったな。まさかこんな所まで追いかけてくるとはな」
緒形　「俺は何処までも追いかけるよ」
ロバート「どうして此処がわかった？」
緒形　「鈴木健太の部屋からメモが出てきた」
ロバート「なるほど。で、俺に何の用だ」
緒形　「杉本卓也と神奈川県警の癒着を証言して欲しい」
ロバート「横流しの件か」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

緒形　「そうだ。組織ぐるみで押収した麻薬をシンジケートに横流していた」
ロバート「……わかった。証言しよう。ただし条件がある。そのメモを渡してもらおう」
緒形　「嫌だと言ったら？」
ロバート「緒形さん。あんたが死ぬ事になる」
緒形　「それは困るな」
ロバート「なら渡してくれ」
緒形　「……お前が殺したのか？」
ロバート「……誰を？」
緒形　「とぼけるな。杉本卓也の秘書、鈴木健太だよ」
ロバート「あれは事故だろ」
緒形　「あれが事故だ？」
ロバート「……あぁ、俺がやった。それも証言しよう」
緒形　「そう言う問題じゃねーだろ」
ロバート「じゃー何だ」
緒形　「お前は殺人犯だ」
ロバート「あぁ、俺は殺人犯だ」
緒形　「開き直りか」
ロバート「何を言われても仕方がない」
緒形　「どうして殺した？」
ロバート「横流しを告発されるから殺した」
緒形　「誰に指示された？」
ロバート「俺の独断だ」
緒形　「あの事件はお前一人の独断で動けるような、そんな安い事件じゃない。誰かに指示された筈だ」
ロバート「わかった。正直に言おう。杉本卓也だ。あのままだと麻薬の横流しを告発されるから杉本卓也の命令で殺した。なにもかも証言する。その代わりメモを渡すんだ」
緒形　「俺も最初はそう思っていた。事件の黒幕は神奈川警察か杉本卓也だと。だけどメモを見ていて気が付いたんだ。この事件の裏にはとんでもない組織が絡んでいる。どうして犯罪シンジケートが国家レベルで活動しているのか教えて貰おうか」
ロバート「そこまでだ」
　銃を向けるロバート。
ロバート「これ以上詮索すると俺はあんたを殺さないといけなくなる」
緒形　「メモは良いのか？　俺が死ぬとメモはマスコミに流れるぞ」
ロバート「流したきゃ流せ。マスコミなんてスポンサーを動かして幾らでもコントロー

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ルできる。資本主義社会は金さえあればなんだってできる。そんなことはあんたもよく知ってるだろ。……あんたの記事読んだよ。パレスチナゲリラやインドネシアの東チモール人、ミンダナオ島のイスラム戦線、西サハラの住人、チベット民族。一般的な記事とは違う本質を突いたしっかりとした取材だった。正直なところなにもかもあんたの記事の通りだ。世界では戦争・混乱・崩壊が日々起こっている。子どもの前で殺される母親。飢えて死んでいく子ども達。力を持つ者が既得権益を守るため、そうしたことを放置している。しかもそれらの情報はマスコミによってコントロールされて偏見をばら撒かれている。……あのな緒形さん。あんたがこれまで取材をしてきた真実は底辺の話だ。世の中はピラミッド型に出来ている。国家を動かしているのは政治だが、世界を動かしているのは政治なんかじゃない。ピラミッドの頂点にいるほんの一握りの人間だ。其処に足を突っ込んだら必ず殺される。あの秘書みたいにな」

緒形　「お前が殺したんだろうが」

ロバート「彼は余りにも組織の秘密を調べすぎた。何度も警告したが聞かなかった。あするしかなかったんだ。あのままだともっと多くの人間が死んでいた。世界のパワーバランスが崩れるともっと多くの人間が死ぬ事になる」

緒形　「話をすりかえるな」

ロバート「人間は誰しも自分を納得させるために生きている。自分を肯定させる目的で行動している。そのくせ相手を思いやるふりをして生きている。自分は良い人ですって顔をして生きている」

緒形　「だから何だ」

ロバート「世の中そんなもんだって事だよ。北半球に産まれればそれなりに豊かな生活ができる。しかし南半球に産まれれば待っているのは飢餓と紛争だ。せっかく日本に産まれだんだ。地道に幸せを求めていれば特殊なケースでもない限り幸せに暮らせる。あんたには家族が居るんだろ。ムキにならずに素直にメモを渡してくれ。そうすれば殺さなくてすむ。横流しの証言もする。十分な大スクープだ、それで良いだろ。あんたがこのまま調べを進めていけばピラミッドの頂点に触れてしまう。そうなったらあんただけでなく、他の人たちも巻き添えを食うことになる」

緒形　「……わかった。言う通りにする」

銃を降ろすロバート。

ロバート「メモは？」

緒形　「盗られた」

ロバート「嘘付くとためにならないぞ」

緒形　「ホントだよ。盗賊に襲われたんだ。そいつらに盗られた」

ロバート「まずいな。俺をたどるうちに誰かに嗅ぎつけられたな」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

緒形　「襲われたのはメモのせいか？」
ロバート「そうだ。襲ったのはどんな奴らだった？」
緒形　「ゴールデントライアングルを縄張りにしている革命軍だ。麻薬商人のチャンなら詳しいことを知っている筈だ」
ロバート「チャンはどこにいる」
緒形　「エレチェ祭の真っ最中だからステージ周辺にいると思う。こっちだ」
走り去る緒形とロバート。
暗転。曲が入る。
シーン1～シーン6まで、曲が流れたまま明転、暗転を繰り返す。

○シーン1
すぐ明転。
考え込んでいるポール。
少し離れてタカとゆき。
タカ　「本当にあの人じゃないの」
ゆき　「まったく違います」
タカ　「どうして？」
ゆき　「さぁ？」
タカ　「佐藤正人じゃないの」
ゆき　「山下康幸です」
タカ　「何ゆえ？」
ゆき　「さぁ？　それよりももう一人の人はどこですか」
タカ　「ロバートのこと？」
ゆき　「そっちだと思うんですけど」
タカ　「そんな筈ないんだけどな」
ゆき　「そのロバートはどこにいますか」
タカ　「アヘンを車に積み込んでるんじゃないかな」
ゆき　「車は何処ですか」
タカ　「それが何処なのか分からないんだよね」
ゆき　「私、ちょっと探してみます」
走り去るゆき。
タカ　「はて？」
曲ＵＰ。暗転。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

○シーン2
すぐ明転。
エレチェ語で話をしているロバートとチャン。
緒形「(前向いて)何を言ってるかまったくわからん」
曲UP。暗転。

○シーン3
タブレットを必死に操作しているタカ。
空を見ながらやって来る緒形。
緒形「真黒い雲がモクモクしてるぞ。こりゃあ一雨ふるんじゃねぇかー」
タカ「社長か。ビックリさせないでよ」
緒形「別にビックリさせてないぞ」
タカ「ちょっと集中してたから」
緒形「そんな必死になって何してんの?」
タカ「ネットでポールの事件を調べてるところ」
緒形「ポールの事件って何だ」
タカ「やっぱかみ合ってないね」
緒形「ゆきちゃんはどうした」
タカ「ロバートを探しに行った」
緒形「一人で?」
タカ「うん」
緒形「なにやってんだよ。クッションはどうしたんだよ」
タカ「社長、私、何が何だか皆目わからないのよ」
緒形「どうしてそんな混乱してんだよ」
タカ「教えて。今どう言う状態なの。いったい何がどうなってんの」
曲UP。暗転。

○シーン4
すぐ明転。
タブレットを必死に操作しているタカ。
やって来るロバート。
ロバート「おい、ポールはどうなった?」
タカ「ゆきちゃんには会った?」
ロバート「……ちょっと待て。……どういうことだ。……此処に来てるのか?」

著作権:SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

タカ　「ってことはまだなんだ。あ～よかった。あのね、私、勘違いしてたの。ゆきちゃんのことをポールが殺した両親の子どもだと思い込んでしまって、ポールとゆきちゃんを会わせちゃったの。お互い、は？　みたいな感じになちゃって、ほんとおっちょこちょいで恥ずかしくて、穴があったら掘ってもう一度埋めたいくらいです」
ロバート「なんだそれ」
タカ　「だからポールは大丈夫なの。大丈夫じゃないのはゆきちゃんなの。ゆきちゃんってロバートが殺した秘書の妹さんだったんだね」
ロバート「緒形さんから聞いたのか？」
タカ　「うん。やっぱこう言う仕事してる人ってみんな殺人犯なんだね。で、いろいろかきまわしちゃって申し訳ないんだけど、何卒、ゆきちゃんと話をしてほしいの。話をしても心のわだかまりは消えないだろうけど、それでも停滞してるよりはマシだと思うの。お願いだから会って話をしてあげて。こう言う事はどっかで終わりにしないとゆきちゃんがかわいそうだから」
ロバート「……わかった。どこにいる？」
タカ　「今、緒形さんが探しにいってるから取り敢えずここにいてもらえる。それとね、ほら、これ」
曲ＵＰ。暗転。

○シーン５
すぐ明転。
オモーラに必死に尋ねているゆき。
ゆき　「ロバート知らない？」
オモーラ「ロボット死なない？」
ゆき　「いやロバート」
オモーラ「いかロボット」
ゆき　「車は何処にあるの？」
オモーラ「車は何処にあるの？」
ゆき　「私が聞いてるの」
オモーラ「私が聞いてるの」
ゆき　「まいったな。もういい」
オモーラ「まくったな。相撲は良い」
曲ＵＰ。暗転。

○シーン６

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

すぐ明転。
シーン４の続き。
タカ　「ほら、これ」
ロバートにタブレットをみせる。
ロバート「（笑）ポールか。若いな」
タカ　「ちょっと調べてたの」
ロバート「ポールがあの事件の犯人だったとはな」
タカ　「知ってるの？」
ロバート「過去の事件は捜査の参考資料として勉強させられるんだ」
タカ　「そっか。元神奈川県警だもんね」
ロバート「なんて書いてあるんだ」
タカ　「どの記事も社会の責任やら社会の闇やらありきたりの言葉をありきたりに語っているだけでほんと下らない記事ばっかり。こう言う事件ってさ、おきた時は大変な騒ぎになるけど彼らがどうやって社会に戻ってどう生きているのかなんてあんまり興味を持たれないからね。あったあった。これだよ。ポールが言ってた女の子。えーっと、少年Ａに惨殺された被害者の倉田徹さん、倉田幸子さんの娘、倉田陽子ちゃんは中国国籍である幸子さんの両親に引き取られる事になった」
ロバート「中国国籍？」
タカ　「みたいだね。なんとか見つけ出して取材しなきゃ。幸せだと良いんだけどな」
ロバート「どうも引っ掛かるな。タカさんが勘違いをしていたのは分かるが、ポールまで勘違いしているのは妙じゃないか……しまった！」
タカ　「なに？」
ロバート「通訳の子はどこにいる」
タカ　「どうしたの？」
ロバート「通訳の女の子だ。何処にいる」
タカ　「さぁ？」
走り去るロバート。
タカ　「えー、そんなー！」
走り去るタカ。
曲ＵＰ。暗転。

○場　エレチェ村（取引部屋）
すぐ明転。
駆け込んで来るロバート。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート「……」
銃を構え、更に奥の部屋に入るロバート。
それと同時に奥の部屋から銃声。
そして燐明の悲鳴。
燐明「キャーーーーー！！！」
曲ＯＵＴ。
風の音。
奥の部屋から放心状態で出てきて倒れこむ燐明。
自動小銃を肩にかけている。
その手には通帳とハンコが握られている。
駆け込んでくるタカ。そして燐明の側へ。
タカ　「燐明ちゃん……大丈夫？」
タカに抱きついて震えている燐明。
そこに駆け込んでくる緒形。
緒形　「……どうした」
奥の部屋から出てくるロバート。
ロバート「ダメだ、死んでる」
緒形　「死んでるって誰が」
ロバート「俺の相棒だ」
緒形　「……ポールか」
ロバート「（頷く）あぁ」
奥の部屋に入ろうとする緒形。
それを遮るロバート。
ロバート「入るな」
緒形　「何でだよ」
ロバート「頭を打ち抜いて自殺している。ポールのあんな姿は見せたくない」
緒形　「……ホントに自殺か」
ロバート「俺は元刑事だ。自殺か他殺かの区別は付く」
緒形　「俺はお前がそこ（奥の部屋）から出てくるのを見ている。お前が殺したんじゃないのか」
ロバート「自分でやったんだ。ポールはヘロイン中毒だった」
緒形　「それなら見せてみろ」
奥の部屋に入ろうとする緒形。
それを遮るロバート。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

ロバート「入るな」
緒形　「これだよ。警察を呼んでくる」
　外に出ようとする緒形。
ロバート「待ってくれ！」
緒形　「なんでだよ。自殺なんだろ」
ロバート「ポールに頼まれたんだ。もしも死んだら誰にも知らせず、そっとエレチェ村に埋めてくれって。だからこのままエレチェ村に埋める」
緒形　「それは組織の秘密を守る為か」
ロバート「組織とは関係ない」
緒形　「殺したのはお前だな」
ロバート「ポールは自殺だ」
緒形　「お前は殺人犯だ。お前が殺したんだよ！」
燐明　「I killed him.!!!」
　曲が入る。
燐明　「私が、私が殺したです……殺したとは私バイ……あの人探しとった……エレチェの神様にもお願いして……ずっとずっと探しとった……まさかこんな所で会えるとは思わんじゃった……私が渡したバッチ……あの人バッチ持っとった……あの人私のこと覚えちょった……私が銃向けたら……陽子ちゃんじゃろうって、……久しぶりじゃなって……えらい大きくなったバイって……こんな綺麗になりおってからに……おじさんなんとか死なんよ～にしとったけど……薬の量が増えてそろそろ危かったよ言うて……間に合って良かった～言うと……あの人私のこと覚えちょった……私言うたバイ……私が何か悪い事したと……お父ちゃんとお母ちゃんが……何か悪い事したと……なーんもしよらんよ……何でね……ねえ、何でね……したらね……これ（通帳）渡すんよ……悪かったな言うて……ごめんな言うて……こんなもんじゃつぐなえんけど……勘弁してくれって」
　通帳の名義をみるタカ。
タカ　「通帳……倉田陽子」
燐明　「わたし、わたし、どうしても撃てんかった……涙が出てきてしもうて……なんでか体が震えてしもうて……どうしても撃てんかった……そしたらなんばしとるとかって……早く殺ろさんと……頼むから早く殺ろさんと……おじさんつらかって泣きながら言うんじゃ……撃てんかった……どないしても撃てんかった……ちくしょう！　ちくしょう！　ちくしょうー！！」
　気持ちの整理がつかない燐明。
タカ　「燐明ちゃん。ちょっと休もう。ねぇ」

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

燐明　「私が殺したです」
タカ　「大丈夫、大丈夫だから」
燐明　「私が殺したです。私が殺したです……」
恐る恐る入ってくるゆき。
ゆきに気が付くロバート。
ロバートに気が付くゆき。
緒形に視線を送るタカ。
うなずく緒形。
燐明を外に連れ出すタカ。
ゆき　「（緒形に）どうしたんですか」
緒形　「ポールが自殺した。その現場を見ちまってな。でもタカがついてるから大丈夫だ。それよりゆきちゃん。こいつがお兄さんを殺した山下康幸だ」
ロバート「……」
ゆき　「久しぶりだねヤマさん。ずいぶんさがしたよ」
ロバート「すまなかった」
ゆき　「どうして突然いなくなっちゃったの」
緒形　「ちょっと待ってもらえる。豆鉄砲を食らった鳩のような気分なんだけど」
ゆき　「ごめんなさい。じつは緒形さんに隠していたことがあるんです」
緒形　「この展開はそうだろうね」
ゆき　「本当にすみません。じつは私のお兄ちゃんと山下さんは幼いころからの親友なんです」
緒形　「いわゆる幼馴染ってやつか」
ゆき　「そうです。いろいろと事情があって隠してました。本当に申し訳ありませんでした」
深々と頭を下げるゆき。
緒形　「いいから頭を上げて。それで事情って何？」
ゆき　「お兄ちゃんと山下さんは幼馴染であり、警察大学校の同期でもあります」
ロバート「ゆきちゃん、それは国家機密だからマズいんだよ」
ゆき　「ヤマさん。それならどうして何も言わずにいなくなるの。探しまわったんだよ。せめて連絡くらいしてくれてもよかったんじゃない」
ロバート「政府の指示で早急に日本を発つ必要があった。そのあともとても連絡できるような状態じゃなかったんだ」
ゆき　「それはそっちの都合でしょ。お兄ちゃんは事故死だって言われて、でも、そんな筈はないって分かってて、お兄ちゃんがどうして死んだのか分からなくて、警察

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

の幹部の人に相談にいっても取り合ってもらえなくて、政府の人に会いに行っても会ってくれなくて、そんな話は真っ赤なウソだとかいわれて、なんの根拠もない妄想だって言われて、もうどうすることもできなくて、緒形さんだけが私を助けてくれたんだよ。緒形さんだけが私の話を聞いてくれた。その緒形さんにも真実を話すことができなくて辛かった。だから正直に話す。……緒形さん。私のお兄ちゃんと山下さんは日本政府が極秘につくった中央情報局の捜査官です。中央情報局はアメリカのＣＩＡみたいなものです。山下さんは神奈川県警に潜り込んで不正の実態を調べていました。私のお兄ちゃんは杉本卓也の秘書になって裏取引の証拠を探していました。そこまでが私の知っている事実です」

緒形　「うん、だいぶ話が見えてきた」

ロバート「間違いのないように補足しておくと、中央情報局は試験的につくられた機関で日本国内の捜査に限定していた」

緒形　「それで不正の実態や裏取引の証拠はあったのか」

ロバート「……」

緒形　「心配しなくても大丈夫だ。守秘義務は必ず守る」

ロバート「……」

緒形　「それくらい信用してくれても良いだろ」

ロバート「……わかった。緒形さんを信用するよ。不正や裏取引は確かにあった。ただし杉本卓也の噛んでいる組織が余りにも大きすぎて俺たちの手に負えなかった。だから組織の正体を突き止めようとはするなって健太に繰り返し言った。でも健太はトカゲのしっぽ切りをしても仕方がないと言って聞き入れてくれなかった。……あいつは子どもの頃からそうだった。なんでも白黒はっきりさせないと気が済まない性分で、いろんな人とぶつかって損ばかりしてた。そのくせいつも楽しそうにしているんだ。あいつと一緒にいるとトカゲの頭まで捕まえられそうな気がした。実際に幾つかの証拠を掴んで本部に渡した。あのメモのデータ情報がそれだ。その証拠が本部から組織に漏れているとわかったときには遅かった。健太は組織の手で殺されていた。健太が俺の正体を隠しくれたお陰で、俺は殺される前に日本を離れることができた。それがきっかけで中央情報局は無くなった。そんなものは始めからなかったようになっている。行き場がなくなった俺は組織の歯車として運び屋になるしかなかった」

緒形　「その組織とはどういう組織なんだ」

ロバート「それが、こうやって運び屋をやっていてもまったく分からないんだ。資本主義の弊害だよ。先に権利を獲得して市場を牛耳った者が莫大な力をもつ。奴らは自分の利権を脅かす者は容赦なく殺し闇に葬り去る。しかも表向きには民衆の支持を受け、時には国家権力をも動かせる。組織の正体なんて雲をつかむようなもので、下手な詮

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

索はしない方が身のためだ」
突然、閃光が走り、雷が鳴り響く。
どしゃぶりの雨が降ってくる。
緒形　「……ふって来やがった」
ロバート「俺が知っている話は後でする。それよりも今はポールを埋葬してあげたい」
緒形　「（頷く）そうだな」
ロバート「緒形さんは車を持ってきてくれ。これが鍵だ（鍵を投げる）。裏山の崖下に置いてある黒のジープだ」
緒形　「了解」
ロバート「ゆきちゃんは布を沢山持ってきてくれ」
ゆき　「わかった」
閃光が走り、雷が鳴り響く。
どしゃぶりの雨がもっと強くなる。
緒形　「こりゃひどい雨になったな」
ロバート「その方が人目に付かなくて好都合だ」
緒形　「まぁな。ところでメモはあったのか」
ロバート「チャンが話をつけてくれた。後で受け取る手筈になってる」
緒形　「そっか」
ロバート「誰かに見つかると厄介だ。急いでくれ」
立ち去る緒形とゆき。
奥の部屋に入るロバート。
閃光が走り、雷が鳴り響く。
ポールを引きずり出してくるロバート。
頭部を自分の上着で隠している。
ロバート「……あのさ、思ったんだけどさ、やっぱライオンはバッタ食わねーよ。百獣の王がバッタ食ちゃお仕舞いだよ。……ちゃんとエレチェ村の山に埋めてやるから安心しろ。でもよ、予定通りに移動しているから戻って来いって言ったよな。いっつもこれだ。戻って来いって言ってるのになかなか戻ってきやしない。ようやく戻ってきたと思ったらメンゴメンゴって。いっつも迷惑ばかりかけやがって」
中央付近まで引きずり、その遺体に寄りかかる。
ロバート「……こうなる気がしてたんだ。……なんとなくいなくなる気がしてた。……どうして俺の周りのやつらはみんな先に死ぬんだ。……どうしていなくなっちゃうんだ。……今朝まであんな元気だったのに……そうだよな……ずっと待ってたんだもんな……この日を待ってたんだもんな。……陽子ちゃんに会えて良かったな。……これ

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

でゆっくり眠れるな」
『ふるさと』を口ずさむロバート。
ロバート「うさぎ追いし、かの山、こぶな釣りし、かの川、夢は今もめぐりて、忘れがたき、ふるさと。……あ～、日本に帰りて～な。……日本の大地を踏みしめて、日本の空気を吸って、日本の空をみて～な」
そこに自動小銃を手に現れるチャン。
服は雨でびしょ濡れ。
ゆっくりと銃口をロバートに向ける。
雨音と雷音でその気配は消えている。
暗転。
銃撃音がけたたましく鳴り響く。
しばらくして閃光が走り、雷が鳴り響く。
閃光によって血まみれで倒れているロバートの姿が確認できる。
チャンに明かりがあたっていく。
チャン「ケシを栽培する為には広大なケシ畑と多くの農民が必要です。それを確保するためには地域の軍事や行政をコントロールできる権力が必要です。革命軍の人が教えてくれました。あのメモは革命を阻止しようと企む悪い奴らの物だと。奴らは私たちがケシを栽培出来ないようにし、餓え死にさせ、最終的にはケシ畑を横取りするのだと。だからあのメモを要求する者が現れたらエレチェ族を守る為に殺せと。それが神エレチェのお言葉なのだと」
雨音が弱くなっていく。
徐々に美しい光が舞台を照らす。
チャン「僕は日本が何処にあるのか知りません。タカさんは日本は豊かな国だと言っていました。たぶんケシ畑が広大にあってたくさんのケシを収穫できるのでしょう。日本は銃規制があって平和な国だとも言っていました。銃がなくてどうして平和なのでしょう。銃がなくてどうして安全なのでしょう。どうやって悪い奴らから身を守るのでしょう。僕には良くわかりません。そんな日本の国からこれまでになくたくさんの日本人がエレチェ村を訪れてくれました。これも全て神エレチェのお導きだったのでしょう。もうすぐ雨季が終わり、過ごし易い乾季が訪れます。祭りは今日で終わりです。これからはもっと仕事を頑張って日本と同じぐらいケシを収穫できるようにしたいと思います。これがエレチェ村で起こった出来事です」
美しい光に包まれながら音が上がっていく。
ゆっくり暗転。

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com

（注）本作品の著作権はＳＨＯＳＡＫＵ事務所に帰属しております。本書の内容を権利者の許諾なく複製・複写・翻案・放送・出版・データ配信（送信可能化を含む）などすることはできません。

Ｆｉｎ。

著作物の使用及びお仕事の依頼は下記まで。

著作権:SHOSAKU 事務所

連絡先:090-4961-6521

メールアドレス:info@sho39.com

ホームページ:http://www.sho39.com

著作権：SHOSAKU 事務所　http://www.sho39.com